325
368

始

海老名彈正先生述

同上清話

東京

大學館發行

大正
4. 8. 12
內交

卷頭言

活きたる社會に處するには活きたる精神がなければならぬ。

濁れる社會に處するには、潔き精神がなければならぬ。

向上的生活、靈的生活こそ、吾人のごらざるべからざる處、實に吾々は靈の閃く道をこそ辿らねばな

らぬ。

腐れる者よ、汝は暗き、醜き、うめき、煩ひ、悶への荊の道を永久に歩まんとするか。

覺めよ、醒めよ。汝の生涯をして、神の御袖に包まるべく潔かれ。

編者言

一、本書は我が宗教界の權威者たる海老名彈正先生が胸琴にふれたる感想を披瀝して我等の歩むべき道に大なる靈光を投げらる。

一、本書は先生の講話を編者に於て筆錄したるもの、而して校正に際して嚴密なる校閲を請はんとせしも、時に先生久しく旅行不在の爲め、且つ出版を急ぎ、校正を請はずして公にしたり。されば編者の不文なる或は其の不備の點もあらん、この故を以て先生に累を及ぼすなからん事を。

一、本書の配列、及び各章各節の題目見出し等は編者に於て附した

――編者言――

るもの、されどつとめて内容と相添はざるの嫌ひなきを期したり。

一、終に臨み先生の幸に健在ならんを祈る。

菊池曉汀識

目次

■國民的自覺を促す……一五
□個人の價値……一
□眞の愛國者たらざるべからず……四
□日本民族結束の大精神……六
□此の偉業の完成を期せよ……九
□眞の自己を見出せ……一二
■國民教育の新要素……一四
□認められたる個人の價値……一四
□基督教と個人主義……一八

——日　次——

□誠に大なる悟道……二一
□人何を以て其生命に易んや……二五
□即ち教育の新要素……二八
□不完全なる國民教育……三〇

■信念の動搖……三二
□歐米思潮の唱道傳播……三二
□人情自然の傾向……三三
□利己主義の横溢……三四
□個人の自覺は國家隆盛の基……三六
□自愛心と道德の出立點……三八
□理想界と現實界の衝突……三九

□偉大なる靈的要求……四二

■人格の獲得……四四
□唱道せる人格論……四四
□人格の修養……四六
□日本の獲得せる人格……四八
□眞の人格を形つくる道……五二
□吾人の唱道する新道義……五四
□基督教と一夫一婦主義……五六
□國民道德に衝突する一大精力唱導……六〇
□眞理の傳播と努力……六二

■宗教の本領……六四

——日　次——

□青年と宗教……六四
□宗教の研究……六六
□宗教の進歩……六九
□宗教とは何ぞや……七六
□日本民族と祖先崇拜……八二
□日本人發展と宗教……九二
□基督教と世界的精神……一〇一
■發展的日本人性格論……一〇五
□世界的發展の精神氣力ある日本人……一〇五
□從來發展せざりし理由……一〇七
□世界的發展の要素……一一〇

□勤儉貯蓄と喜ぶべき就職難……一一二
□敵愾心は世界的發展を害す……一一六
□敵愾心は速に脱却すべし……一二一
□發展を防害する諸點……一二三
□同化は世界的發展の捷經路……一二九
■何を自覺せしや……一三一
□大なる決心の門出……一三一
□オーソリティを失つた日本……一三四
□立ちて父に歸らん……一四〇
□自覺の叫び……一四二
□尊き自覺……一四三

■復活の信仰……一四五
□富める者と貧しき者との比喩未來觀……一四五
□ユダヤ人と信仰……一四八
□奇蹟と信仰……一五三
□正義の勝利……一五五
□何故奇蹟を信ずるか……一五七
■新興力の所在……一六〇
□貧しき者は幸なる哉……一六〇
□天然の不便に反抗して起りし文明……一六四
□神の力を信任せよ……一六九
□求めよ然らば與へられん……一七三

□涙を以て播く者は喜び以て刈る……一七五
□山も動かす信仰の必要……一七八
■宗教界の適種生存……一八〇
□神社崇敬と國民道德……一八〇
□神社と崇敬の改善……一八四
□根本の改善……一八五
□固陋因循の政策……一八八
□迷信惡習僞善の勃興……一九〇
■ペテロの告白……一九三
□基督の問ひ……一九三
□我爾は活ける神の子也……一九九

■健闘の靈……二〇四
□惱みの人一變して喜びの人……二〇四
□神の恩寵を認めたパウロ……二〇五
□信ずるに依りて罪は許さる……二〇八
□許されたと自覺せし時……二一〇
□すべてのものを壓倒す……二一一
□パウロの見解……二一三
□基督教徒の生活……二一四
□無常の世界は恰當の戰場也……二一七
■宗教界に於ける同胞論……二一八
□朝鮮人の貢献すべき仕事……二一九

□朝鮮人の反感……二二〇
□彼等は進取たり得る……二二一
□世界的大精神を捉へよ……二二二
□祝福すべき進路……二二四
■新文明の獅子吼者……二二四
□華々しき活動は三十八歳の時……二二四
□不思議の夢は益々不思議となる……二二八
□所謂九十五ヶ條の信仰告白……二三〇
□ルーテルの血戰の烽火は揚つた……二三二
□天下の智者と闘ふ昂々たる決心……二三四
□羅馬法王に反抗し逐放令を受く……二三六

——目　次——

□萬人の面前にて敵論を折伏す……二三八
□羅馬法王の敎書を火中に投ず……二四一
□壯絶に快絶なるウオルムス大會議……二四二

■己れに克ちし人……二四七
□人生はイエスとノーの二途……二四七
□遊廓では飲むが家では一滴も飲まぬ……二四八
□博奕者流の一例……二四九
□常に慾を制した一老人……二五一
□日が照つても洋傘をさゝぬ……二五四
□利を棄てゝ義を求めし其大克己……二五六

■寧ろ平民的生活……二五八
□貴族主義を拋て……二五八
□東洋の弊……二五九
□大の男の子を小供扱ひ……二六〇
□趣味を伴へ……二六一
□馬鹿らしき茶人風……二六二

■敬虔の人……二六三
□一敬翁生涯の修養……二六三
□敬天の至情……二六七
□永遠の靈界に行けり……二七〇

■有終の美を濟さしめよ……二七二
□國家の至寶……二七二

——目　次——

□元老の存在……二七四
□世界的人物大隈伯……二七七
□國民と立憲……二八四
■二重生活の愚……二八六
□退嬰的生活……二八七
□和服と洋服との比較……二八八
□煩雜と苦痛の生活……二九〇
□徒勞無益なる改良服……二九二
□世界生活に一致せよ……二九三
■神聖なる戀愛に據る結婚……二九五
□家と家並に婿と嫁との釣合……二九五

□娘を犧牲にしたる親……二九六
□戀愛の成立ち居らざる結婚……二九七
□媒介者の心得違ひ……二九八
□一夫一婦の嚴正なる觀念……二九九
□出さない出ないと云ふ主義……三〇〇
□神聖なる戀愛……三〇一
□自由結婚の可否……三〇二
□最高の結婚法……三〇三
□結婚の目的を解せよ……三〇四
□男女關係の改良……三〇五
■現代社會の表面裏面……三〇六

□誠意なき社會……三〇六
□嘆すべき宗教的傾向……三〇八
□誠意なき教育界……三〇九
□忠孝の觀念なき實證……三一一
□無神無靈魂の社會狀態……三一四
■熊本時代の回顧……三一六
□練習の必要……三一六
□英作文と雄辯の練習……三一七
□日本語になく英語……三一八
□姿勢の稽古……三一九
■雄辯の修練……三二五

□新たなる立讀……三二五
□修練の第一要素……三二六
□音聲の修練……三二八
□抑揚の修練……三二九
□態度と姿勢……三三〇
□身體の强健……三三一
□雄辯最高の秘訣……三三二
■附錄……三三三
一戰鬪の教會……三三三
二官民衝突の不詳……三四四

向上清話終

向上清話

海老名彈正述

國民的自覺を促す

個人の價値

個人の價値を自覺するものは、自から好んで狹隘なる個人主義に陷る弊がある。この弊習は多くの人の免れざる所であるが、畢竟するに個人の價値の見方が徹底して居らないからである。國民より切り離し、社會より取り除けて、何

——國民的自覺を促す——

程個人の價値が存するものであるか、眞面目に實驗して見れば分る。又國家の嚴を認むるものは、國家萬能主義を振りまいて、個人も人類も又他の國家をも自國の犧牲にすべきものと考ふる。個人を犧牲にし、人類を蹂躙する國民は斷じて永久なることを得ぬ。斯る國家は國民の國家にあらずして、一人又は少數者の國家であつて、多數の國民を一人又は少數者の奴隷とするものである。その永久なること能はざるは當然のことである。人類主義を旨とするもの亦國家家庭をなみする弊習がある。昔時より家庭を棄て、國家を棄てた沙門は決して少くなかつた。今日とても尙此種の趣味を有するものがある。人は家庭を離れ、國家を離れて圓滿なる人格を造りて豐富なる悅樂を享受することは出來ない。個人の價値は神及びその國との深い關係を自覺するより生ずるのである。神及びその國を離れての個人は切られたる枝のやうなもので、早晩枯るゝこと疑を

入れぬ。本來神の中に生き且動き且存する人は、同時に國民の中に生き動き存するものである。この國民は神の中に生き且動き且存するが故に、また人類と離れて豐富なる存在を完うすることは出來ない。この深い意義は實際實驗して見るにあらざればわからない。永く狹隘なる國家主義に養成せられた人は、個人の價値を聞いて異樣な感を起す憂がある。又人類同胞主義を聞いて國家をなみするかの如き感想を生ずる。是れは過りたる教育の結果といたさねばならぬ。然れども開悟し來れば、個人が家庭の中に生き、國家の中に動き、人類の中に存する如く、家庭も國家も人類も個人の中に存するのである。神は萬有の中にあり、萬有を貫き、又萬有の上にある。神は個人と家庭と國家と人類とを一貫し給ふ。神は是等に現實し、又是等を抱擁し給ふのである。吾々人たるものは天地の一部分ではない、宇宙の斷片ではない、眞に神の肖像である、神の

子である、神の性格を有する、吾人の人格的内容は豐富にして無盡藏である、自識あり、自斷あり、自愛あり、自由あり、部分的にあらずして全體的である。この眞面目を認め、この本來を發揮するときは、個人と家庭と國家と人類とを貫通し、差別の中に平等を認め、平等の中に差別を重んずることが出來る。この全體生活を實現するのが乃ち吾人が生活の本義である。

○眞の愛國者たらざるべからず

吾人は自愛すると同時に家庭を望まざるを得ぬ。家庭の幸福を望むと同時に、國家の繁榮を願はざるを得ぬ。國家の繁榮を願ふと同時に人類の進歩を促さゞるを得ぬ。女子は良妻賢母たると同時に、愛國者たることが出來る。愛國者たると同時に萬國的運動に加入するを得る、獨り愛國者たるを得るのみならず、愛國者たらざるべからず、獨り萬國的運動に加入し得るのみならず、之に加入せざるべからず、然れども吾々が世界に貢献する最も安全にして有効なる道は吾が同胞國民を中堅とすることである。國民を中堅として家庭を改善し、個人を教養し、人類の幸福を增進するは、最も能く吾人の目的を達する所以である。故に吾人は眞面目に愛國者たらざるべからず、少くとも吾々日本人としては此國民を中堅とするが最もその當を得るものと思ふ。

基督がその大目的を達せんが爲め、飽くまで國民的態度を取り給ふたるは至當のことであらう。保羅も同じくこの同胞國民を中堅として異邦人傳道に從事したのである。基督が十二使徒を選定せられたのは、十二支派の代表者となし給ふた所以である。彼がパウロの如く教會の建設に盡力せられなかつたのは、その眼中全國民の教化を旨と爲し給ふたからである。又彼がその傳道の最後に

エルサレム城を衝き給ふたのは、その運動が國民的であつたからである。彼がユダヤ民族を中堅として世界人類を敎化するの志望ありしことは疑ひない。基督は自己を此民族と深く結び給ふたのみならず、之を敎導して世界を敎化することが神よりの使命なりと信じ給ふた。故に彼はその同胞より排斥を受けたるにも係らずその祖國を去つて。異邦に往くを肯てし給はなかつた。彼は國民の首府にて犧牲たらんと決心し給ふた。その主義の正邪曲直は異邦人の良心に訴へずして、その同胞國民の良心に訴へ給ふたのである。彼れこそは眞のヘブル人にして又眞の愛國者であつた。吾々も亦この道程を辿るべきではなからうか。

○日本民族結束の大精神

二千年の歷史を有する日本民族の存在は地上に於ける偶然のものにあらず、吾人が人格の根據は此史的民族の中に存する。是れ恰も基督の人格がその根據をイスラエル民族の中に有したるが如きである。吾々は日本民族の生へ拔きである。此民族を中堅として立つ外別に立脚地はない。基督と釋迦とその運動の異なる所以は前者が國民的にして、後者が個人的であつたことである。吾々は眞面目に愛國者たらざるべからず、この國民の良心となつて、之を敎化せねばならぬ。自己と國民と同一たらしめねばならぬ。吾人の敬神と愛國心とは同一精神たらねばならぬ。日本國家を以て神の敎會たらしめよ、パン種の麥粉全體をふくらす如く、吾々の精神は國民の全體を聖化せしめねばならぬ。この精神を以て敎育機關をも政治機關をも財政機關をも聖化せしむる覺悟がなければならぬ。吾人の宗敎的生活は敎會の一隅に制限せらるべきものではない、宜しく

國民全體に行き渡らざるべからず、日本民族を達觀して神の選民と認むる位の覺悟なかるべからず。

我が同胞を結束する精神は一にして足らずと雖も、その最も深くして且大なるものは基督の精神たらざるべからず。日本民族は何時までも單純なる日本民族として發展することは不可能である。臺灣は約五百萬の支那人を收容し、朝鮮は一千五百萬の鮮人を有するのではなからうか。是れは實に莫大なる異民族である。之を日本化するにあらざれば、日本帝國が大發展を遂げ得ないこと疑を入れぬ。若し滿洲に於てもその勢力範圍を擴張することあらば、日本人は異民族の同化に忙殺さるゝ程の能力を消費せねばならぬ。又他日その權力を南洋に振ふこともあらば、その同化事業の偉大なるは蓋し想像するも及ばざる所である。帝國の政治家は眞面目にこの偉業を考究しつゝあるだらうか、帝國の經濟家は如何であらう。帝國の教育家は何の名案を有するであらうか。吾々の聞かんと欲する所である。是等二千萬の異民族を同化するは當面の急務である。之を忽緒に打棄て置かんか、日本は更に二師團や四師團を增加するも、鎭撫に苦しまざるを得ない、又果してその効果あるやも疑はしい。

○此偉業の完成を期せよ

此偉大なる事業は誰れの肩に懸るべきか。愼重に慮らねばならぬ。從來の日本魂のみにては到底此偉業を完成することは出來まい。この日本魂が天地の神に徹底し、更に聖化され、更に雄大となるにあらざれば、この偉業は成し遂げらるべきものでない。吾々基督の精神を發揮し來るものが蹶起するにあらざれば、誰れが之に當るべき資格を有するであらう。由來帝國の外的發展と內的精

神の充實とは釣合が取れて居らない。さりとて今更外界に向ふ發展を止むる譯には行かぬ。內部の修養に心付くものゝ奮鬪を要する外はない。基督教徒は果して此偉業を双肩に擔ふ資格あるや否や、自ら覺悟する所なくしてよからうか。吾人を以て觀れば、是は基督教徒の結束如何によるものである。眞面目に國民を愛する精神を以て奮鬪さへすれば、我同胞の賛同し來らんは疑ひないと思ふ。基督新教の信徒は約十萬に達すと算す。數字に於ては力なきが如しと雖も彼等の多くは中等民族にして、最も有力なるものである。試に思へ東京帝國大學に在學するものゝみにても約三百名もあるべしと云ふ。是れ實に驚くべき數である。是等三百名の青年學生が、國家の偉業をその双肩に荷ふて蹶起すると假定せんか帝國の將來は斷じて悲觀すべきことではなからう。此外東北大學にもあるべく、北海道にもあるべく、畿內にもあるべく、九州にもあるべし。之を合算すれば帝大の學生にして基督教徒たる五百名を下らないのであらう。是等が相互に氣脈を通じ、愛國の志士を以て自任し、帝國の精神的充實に從事するあらんか、國民の外的膨脹は寧ろ吾人の歡迎する所である。試みに是等の志士が朝鮮人の同化を以て自任するとせよ、半島の面目が忽ち一新し來らんこと毫も疑を入れぬ。之に加ふるに種々の專門校にあるものゝ其官立私立を問はず協力一致して國事に當らんか、帝國の前途實に樂觀すべきである。是等有爲の學生が結束して蹶起さへすれば、社會の誘惑は毫も恐るゝに足らね。要は結束の强弱如何にあるのみ。堅く結束すれば一部の社會は愚か、帝國全部をも双肩に荷ふことを得べし、結束せざらんか、社會の壓迫は片端から彼等を薙ぎ去らんこと從來の事實に徵して明である。吾人は更に是等學生に向つて熱望する所がある。彼等は目前の事に又自己の身上に又就職の如何に汲々たるべからず懼疑

たるべからず、寧ろ熱烈に愛國心を鼓吹せよ。之が鼓吹に目前の事を忘れよ、就職難を忘れよ、一身の事を忘れよ、此熱烈なる愛國心は自己を偉大ならしむるものである。自己を鞭韃するものである。自己を深刻ならしむるものである。多數の學生は必ず彼等を嘲笑するならんも、彼等は宜しく天下國家を談ずべし、眞面目に國民の眞相に觸るれば、慷慨すること悲憤すべきこと枚擧に遑あらざるべし。こゝに氣慨を勃發し來るべし、元氣も振起し來るべし。然らば學年の試驗を苦に病み、悄然として屈するが如きことは斷じてないであらう。

○眞の自己を見出せ

基督教徒たるものは家庭の中に國家の中に人類の中に自己を見出しつゝあるではなからうか。この自己は國民と結び付かざれば發揮し來らない。國家にも人類にも民族にも沒交渉の自己は虛僞の自己である。幻の自己である。此の如き自己は忘想である。若し夫れ國民の爲めに人類の爲めに、民族の爲めに熱狂すること能はざる自己は、眞面目の自己ではない。基督の自己と協力し得る自己ではない。吾人は高等の教育を受けつゝある學生が此眞我を自覺し、相互に結束して國家を双肩に擔ひ、蹶起して國事に熱中せんことを祈らざるを得ない。吾人を樂觀せしむると悲觀せしむるとは、實に彼等の進退去就如何に存するのである。彼等にして蹶起し能はざらんか、吾人亦何をか望まん、帝國の前途は悲觀すべきのみ、帝國の窮乏は財政にあらず、二十億圓の負債猶忍ぶべし、然れども人格の窮乏分けても、青年學生に於ける人格の窮乏に至つては、吾人は到底忍び能はないのである。

國民教育の新要素

○認められたる個人の價値

日本の國民教育の新要素として特に承認せなければならぬものは人格である。人格とは苟くも人が自然を超越する以上は備へて居なければならぬものであるが、今日迄案外之に注意を引いて居なかつた。古歌に『人多き人の中にも人ぞなき人になれん人になせん』とあるが、これは人格を咏じたものであらう。人格の中には個人の價値が認められねばならぬ。日本の社會では個人といふものが殆んど顧みられて居らぬ。これ人格の觀念が切實に認められて居らぬ證據である。さらば何が道德教育の要點であつたかと云ふに、時代により消長はあるが、家族を中心とした事は事實であらう。いかなる人も若しや家名を汚す樣

な所業をすれば何の用捨もなく一家眷族の者から罰せられた。年齡たけた人々は定めてその事實を見聞せられたであらう。

自分が極めて幼少の時であつたが、一夜まだ東も白まない前に隣家に只ならぬ騒ぎがあつた。自分の家も隣の家も裏は同じ堀に臨んで居たが、隣家の堀端から多くの人が頻りに何かを揭げて居る音がするので、何事かと怪んだのであるが、それをまた確めぬ中に自分はまた眠つてしまつた。處が翌朝起きて隣家に行つて見れば、座敷の一室が五寸角にて嚴しく閉ぢられ、主人が其中に押込められて居る。何故主人が座敷牢に入れられたかといふと、これは約半年許りも前の事であつたかと記憶するが、自分の向ふの家で新年の酒宴があつたが、其時も盛に何か破壞するやうな、ひどい騒ぎが自分の處へ聞えた。隣りの主人が向の家で醉狂して亂暴を働き、膳椀を投げとばすやら、德利を叩き壞すやら、

終には太刀を拔いて戸障子の嫌ひなく切りまくつたと云ふのである、幸に人の身には怪我もなかつたやうだが、只ですまされぬのはこの主人の始末である。酔狂の上とは云へ武士たるものがこんな亂暴狼籍を働くとは以ての外である。と云ふ譯で早速親戚一同評議の上處分する事となり、家の破滅を救ふ爲め夜中にやつて來て、かくは座敷牢に押籠めたといふ次第である。嚴格なる武士の教育法は、これで其一端を知る事が出來る。無論一個人の修養は、此教育の眼目ではない、其主たる目的物は家である、家の體面である。我等も常に家の名を汚す事なかれと云つて育て上げられたものである。戰場に赴く時などは殊にさうであつた。家の體面、大きくすれば藩の名譽である、殿樣の御名である、主の家名に傷をつけぬ樣にと云ふのとが平生の心がけであつた。我れの爲めにあらず、武士は家又藩の爲めに生きるのであつた。之は武士の教育であるが、思ふに

平民の教育もこれに似たものであつたらう。商賣で暖簾に傷を付けるなと教へる如きも明に家本位の教育であつた事を證據立てゝ居る。これが明治維新の時代を越して、どうなつたかといふと更に考が大きくなつて國家といふ事になつた。教育の大本は國家の力である。國民教育の眼目は實に富國强兵の國家主義に基づけるものである。吾人は之を批難するものではない、否大に賛成する處である。しかし之を以て滿足するものではない。吾人はその家を作れる處の又國家社會を作れる處の一人々々の人格の教育の必要と、その不備とを叫ばずに居られぬ。人格の不完全なる個人を以て作られたる家乃至國と、完全なる人格を有する個人により組織せられたる家乃至國と、この二の中何れを採るべきかと云はれたならば、恐らくはどの國家主義者も個人の人格を重んずる要點を看過しはしまい。家庭國家を作れる個人の價値が如何に尊いものであるかを教へ

る事は教育の一大要素とすべきではなからうか。明治時代になつて歐米の文物が日本に入り、國民精神を最も攪亂したものは、恐らくは個人の思想であらう。瞬く間に烈しい影響を各方面に及ぼして、今や根抵より日本の精神界を攪亂しつゝあるではなからうか。これはいかに成り行くべきかは誠に興味ある見物である。同時に我々も自らその渦中に投じて將來の轉向の一つの力を加へねばならぬ責任があると思ふ。一部の人は直に之を以て家族國家を破壞するものとして怖るゝ。果して家族國家の凡てを斃死せしむべき毒藥として働くことであらうか。數百年來の不消化物を一掃してしまふ下劑として働くか、乃至は徒に何の作用なく、藥にもならず毒にもならぬものとして過ぎてしまふであらうか。

○基督教と個人主義

今は二十五六年も前の事となつたが、熊本に中學程度の英學校があつた。自分が丁度其の校長を辭して、次に新校長某氏が來てその就任式が行はれた時、校長の就任演說に次いで、生徒職員各數名づゝ壇に上つて演說をなし、大に個人の價値を論じた。個人の尊い事は國家も之を如何ともすべからずと云ふ樣な論旨があつたので、忽ち物議を釀し、教員の辭職に依つて辛ふじて落着する事が出來た。確に個人の價値は日本教育界身中の蟲であつた。夫からこれは十年ばかり前の事である。當時一高の生徒であつた校教會員の一人が某學校で堂々と個人主義を主張したので、全校の批難を一身に集め、遂に袋叩きにされやうとした。然るに安んぞ知らん、彼の主張は間もなく一高内に承認せられる樣になり、今日の如き尙ほ魚住影雄なる一人物が居たといふ事は廣く一高生徒の胸奥に止まつて居る。

然れども個人の價値は極めて高きが故に、之を贏ち得るには多大の犧牲を拂はねばならぬ。個人主義は往々に其主張者それ自身を殺す刄である。これが爲めに社會に道を失つた靑年も多くある。これが爲めに家より逐はれた女子も決して少くはない。誠に人格の獲得は幾許かの尊き犧牲を要した。然り又要しつゝある、更に今後尙々多數を要せねばなるまい。

こゝに於てキリストの福音はこれらの犧牲を救ふべく步み來るものである。基督敎には確に一種の個人主義がある。個人の價値を重んじ人格を主張する證跡は歷々乎として居る。然し記憶せねばならぬ。これは決して一朝一夕に得たるものではない。誠に舊約聖書を開け、彼等に最初からの個人主義が眼を開けて居たのでない。家族主義が其精神であつた。アブラハムの家と云ひダビデの家と云ひ又アロンの家と云ひ彼等は皆祖先の血統を重んじて居た。故に總ての事皆家が中心であつた。次に彼等は國家主義に展けた、彼等はこの一大宗敎の源なる民族であつたに拘はらず、不思議な事には來世觀が明ではなかつた。否不思議ではない。彼等は來世觀を考ふるより、寧ろ現在及將來の國家に熱中した。彼等は愛國心に熱狂して餘事を考ふる遑がなかつた。神殿に額いて唇よりもらす聲は必ず國の安泰を祈る言であつた。若し夫れ一人の武運長久の如きは國運の祈願の爲に一身の利害を忘れたものである。

○誠に大なる悟道

然るに玆に彼等を悲愁に泣かしむる事が生じた、即ち國家の滅亡であつた。バビロン帝國の爲めに彼等の祖國を奪はれた事である。斷腸何ぞ堪えん、彼等が唯一の寶は奪はれた、その生命が亡びたのと同然である。詩の神を慕ひまつ

る、一篇に歌ふて曰く『あゝ神よ鹿の溪水をしたひ喘ぐが如くわが靈魂も汝をしたひ喘ぐ也』又曰く『われむかし群をなして祭日を守る多くの人とともに行き歡喜と讃美の聲を上げて彼等を神の家にともなへり、今これらの事を追想してわが衷より靈魂をそゝぎ出す也』亡國の悲嘆、神殿を失ふた哀れみ、同情に餘りあり。國は亡び、宮は贖され、同胞は東西に離れ散じた。彼愛國の熱情の志士地上に何の望みもなくなつた譯である。否彼等にはこの間に一つの活路が開けてあつた。又歌に曰く『あゝわが魂よ汝何ぞうなだるゝや、何ぞわが衷に思ひ亂るゝや、汝神を待ちのぞめ、われに聖顏のたすけありて我れなほ、わが神をほめたるべければ也。わが神よわが魂はわが衷にうなだる。然ればわれヨルダンの地よりヘルモンよりミザルの山より汝をおもひ出づ』と、こゝ活路がある。たとへ國亡ぶるも人散ずるも神を慕ふ心はわが衷に少しも變りないのである。故に何處にあつても、よし宮殿は見えずも、神を拜し神と交つて居るのである。この大事に遭遇して神を慕ひ喘ぐ精神が朝日の如く勃發して來た。しかも熱烈な神を慕ふ精神である。この神は己れをよく顧み給ふ、たとへ己れ谷底に墜つるも、猶神は我を顧み給ふのである。こゝに神と人との交通が開けた。こゝに一個人が生れた國家滅びて幾萬人の個人が誕生したのである。而も皆神を心に抱いた。故に國家なくも神殿なくも、身は縛せられつゝあつても心の底に薄き世界がある。我一個人の世界がある、人が如何に之を虐待しても如何ともすべからず、彼等は其の周圍を見て少しも怨む處はない。地上には汝の外に慕ふものがないと歌つて居る。その心の奥で神と親しく交つて居るのである。一口に云へば自分が躬自ら神の筈であるとの自覺を啓いた。この自覺は誠に大なる悟道である。否深遠なる實驗である。個人の價値の如何に高きかは此で明で

ある。而もこの尊き實驗は偶然達し得た處のものではない、誠に由る處深いのである。當時の宗教は何れも民族國家の滅亡と共に消滅したのであるが、獨りイスラエルの宗教のみ國家の滅亡に關せず、禮拜式の有無に關せず依然として永續するのみならず、却つて大發展したのは、抑も見遁す事が出來ぬ。何が故によく然るかを探究せねばならぬ。即ちその所以は實に家庭教育或は國家教育にあつたのである。その教育の結果はエリアの如き人物を作つた。エリアはエホバの神を敬ひ奉る上につき非常な熱誠を有して居た。心を盡し意を盡し精神を盡して神を愛したる模範である。彼は神に熱中しその爲めに奮鬪努力した。エリアの生涯は奮鬪努力の生涯であつた。アハブ王を初め多くの貴族を拜すべきを極力主張したのである。かれは個人を如何に考へたかわからぬ。しかしその燃える愛國心を以て神を崇拜した信仰は、國が亡ぶも自己の中に永く殘るべきものである。

○人何を以て其生命に易んや

けれども弱い者は人である。エダヤ亡びて五百年パプテスマのヨハネの時代にはユダヤ民族の精神は復々民族主義に凝り固つて居た。ヨハネは曰く『汝等悔ひ改めよ、汝ら祖先にアブラハムありと思ふ勿れ我れ爾曹に告げん神はよく此石をアブラハムの子とならしむべし』と、彼等は祖先の効績で自分らも刑罰を免れ得ると考へて居た。家柄で救はれるものと考へて居た。彼等に取つてヨハネの一喝は確に警醒の鐘であつた。ヨハネの一身はよく彼等の謬見を正すものであつた。ヨハネはイスラエル人で而も祭司の子である、彼は生れ乍ら神殿に出入りする事が出來るよき家柄の子である。しかるに早くよりこの家を棄てゝ

荒野に行つて、野蜜と蝗虫とを食ひつゝ一人個人として神と親しみ、神の恩惠をうけたのである。家柄を棄てゝも尙斯の如くヨハネの一身はこれ一個人として神を得た實證である。實にヨハネは眞の豫言者であつた。この精神はキリストに依り更に深くし尊くせられた。『もし人全世界を得ともその生命を失はゞ何の益あらんや。又人何を以て其生命に易んや』と、いかに一人の價値が尊きか、又神は如何に一個人を重く取扱ひ給ふかゞ之に依つてわかる。またキリストは常に幼兒を愛し慈しみ給ふた如だが、是は世間並の愛し方ではない。世間並の戯れ方ではない。其可愛い處に尊敬せざるを得ぬ尊い處を見給ふたのである。天國に入るは斯くの如きもの也と云ひ給ふたが、只可愛いもの丈の謂ならば、天國は大して尊い處ではあるまい。幼稚園の氣のきいた位のものと思つて間違いなからう。嬰兒を輕んずる者は、頸に磨臼を懸けられて海の深きに沈められた方がまだ結構であらう。それ位の刑罰ですむものではないと云ひ給ふた。又幼兒を守る處の天の使は今天にありて天の父の御顏を見て居る。天使は幼兒の守り神として父の授け給ふものと敎へ給ふた。一個の幼兒に此大なる價値を置て居らるゝ。故に幼兒を輕んずる者は罪が重い。神を輕んずると同然である。個人の價値はいかに尊いか。考ふれば考ふる程人の意表を拔く事益高いのである。この意味に於て幼年、少年、青年は尊き運命を荷へるが故に、よく之を敎育しなければならぬ。神より授された使命である。國家はこの使命を帶びて居る。國家のみならず父母長者もこの大任に與つて居るのである。彼等は手を盡し精神を碎いて小兒の爲めにこの運命を開かねばならぬ。從來我國民にこの考へが至つて乏しかつた。否殆んど皆無であつた。しかし必ず斯うなつて來なければならぬ。

○即ち教育の新要素

斯くの如き處に根抵を置いてかゝらねば一個人の價値を示さんが爲めに家を亡ぼす者が出る。國を累はす者が生ずる。只一個人其者の破滅を來す事が起て來る。即ち我儘を云ひ通して親の膝下にその身をも亡ぼすものがある。世に有りふれたる放蕩兒の類は凡てこれである。個人の本當の價値はさう夢の如く作らるゝものではない。一個人に取つても幾許の犧牲を拂はねばならぬのである。人格は決して一朝一夕にして獲得せらるゝ如き者ではない。或は祖先相傳の習慣を無視しなければならぬ危險苦痛がある。然り之を犯して迄もやらねばならぬ程、一個人は値あるものである。この一個人の價は誠に根ざす處深い。先づ何よりも心を盡し意をつくし精神を盡して神を愛する精神を發揮せねばならぬ。神に熱中する至誠に個人の根據を置かねばならぬ。神と交らざる個人は浮萍である。こゝに一個人の價値を置かねば最後は必ず滅亡である。一人を立てんとして家に逆らひ國に逆らひ又その本領をも害うに至る。されば萬善の策として人は本源に立返らねばならぬ。社會國家をして戰と競と敢て個人を解放し得ざらしむるは、實にこの危險を怖るからである。されど日本人の子弟よ、我等は何時迄奴隷の如き境遇に甘んずべきか。堂々たる一個人の人格として光の中に立ち得る日、その日はそも何時來るべきか。答へて曰く、人格が一個人に生るゝ時である。故に吾人は主張する、日本國民教育の新要素として人格の尊嚴を加へねばならぬと。國民教育は決して學校のみにて爲すべきものでない。學校教育は人格教育の一部である。その大部分は家庭でしなければならぬ。今日は學校本位であつて家庭は唯學校の方針に從つて行ふて居る姿である。情勢

として止むを得ぬ事であらうがこれは正反對である。家庭教育を忽にして學校教育を本位とし、學校の便利の爲めに萬人同位、鑄型に嵌る教育の如きは斷じて人格を發揮せしむる所以にあらず。人格教育はよろしく家庭にやらなければならぬ。學校教師は如何にして父母より偉大なる教育を施し得るか。之は斷じて不可能の事である。父母がその恩威を以て一人々々を育て上ぐるにあらざれば、國家は人格ある臣民を生ずることは出來ないのである。

○不完全なる國民教育

わが國民教育の不完全なる點極めて多しと雖もその中最大なるは、家庭教育の忽にせらるゝことゝ社會教育の無能なることである。昔武士の教育は武士の仲間、武士の社會で之を擔當したのである。學校は僅に文字の讀み書きを教へる處に過ぎなかつた。人物は實に武士の社會で磨かれ練られたのである。武士の體面を破る行爲あるものは、仲間から絶交されたのであつた。絶交された者は寺に隱れた。故に吾々はよくそんな事をすると寺へやるぞと戒められたものである。人格ある日本人を作る責任は學校よりも寧ろ社會にある。しかるに學校を比較的善く卒業して來た人間を社會はよつてたかつて墮落の道に引き込んでしまふ。その惡むべく厭ふべき社會を改善するまでは人格の教育はその目的を達することが出來ない。家庭教育も學校教育も墮落せる社會の爲めに滅ぼされつゝあるではないか。日本の社會は教育するは愚か教育を破滅せしめつゝある。

同胞なる基督教徒よ、我等は卒先して戰はねばならぬ。帝國々民の良心となり、良能となつて、奮鬪せねばならぬ。社會の輿論一變すれば學校教育もその

目的を達することが出來る。要は家庭も社會も學校も協心同力して人格を尊重し個人の眞價値を發揚し、神の子たる品位あらしむることである。

信念の動搖

○歐米思潮の唱道傳播

近來、個人主義利己主義自然主義などが著しく其勢を逞しふするに至つたのは我邦の社會の生活狀態から生れ出た自然の傾向たること勿論であるが、わけても夫の歐米の思想や生活に親しく接觸した爲めに、更に一段流行の機運を促進するに至つたのであらうと思ふ。

歐米各國に於ては、夙くから之等の主義思潮が旺んであつたばかりでなく、論文に果た小說に極力之が主張傳播に努めてゐた。それが一度び我邦に傳へ讀まるゝやうになると、さなきだに從來同じやうな傾向を以て居た潮先とて、非常な刺戟を享けて、愈々表向きに是等の主義思潮を唱道することゝなつたのである。

○人情自然の傾向

これまで我が國では個人と云ふものが殆んど其價値や存在を認められて居なかつた。この傾きの最も劇しく現れたのは封建時代であらう。

封建時代の武士は凡て個人よりも家を重んじた。家の爲めには主人でさへ蟄居閉門の浮目を見せられ、場合に依れば親類會議の結果腹を切らねばならぬこともあつた。殊に親は子に對して絕對の權能を有してゐたので、何時でも勝手に自分の子を手打にしてゐた。孤兒などは人間としての價値も權利も持つてゐ

なかつた。ところが近代になるに從つて漸次個人の價値が認められて、今日では子が親を法廷に訴へる例なども決して珍しくないやうになつた。

斯く個人を重んずる思想は元來歐米から傳へられたので、享け傳へた我國の人々は直ちに贊同の意を表したのである。一體かやうに思想に觸れて個人の價値を認むるやうに至つた人は、誰でも、これまで無殘にも蹂みつけられたり無視せられたりしてゐた個人の權利を、親に對し社會に對し更に又國家に對して、出來るだけ主張してみたくなるのは、蓋し人情自らなる傾向であらう。

○利己主義の横溢

個人主義に次で來るものは、云ふまでもなく利己主義である。

昔は農工商の何れを問はず、家には必ず一定の職があつた。そして子は必ず親の職業を繼承したものである。だから職業のある所には自ら之に伴ふ資本があつて、父祖の業を受け繼ぐものは、この資本によつて生活してゐたのである。

それが近代になつてから、家附の資本を其儘讓りうけられる家業を、必ず繼承せなければならぬと云ふことがなくなつた。令假繼ぐにしても、そこに制限がある。例へば長男が繼ぐとなると、次男以下のものは何か他の職業を求めなければならぬ。兄弟共同して家業を繼ぐなどは極めて稀れな例である。それ故何でも各々自分の腕に依つて暮しを立てねばならぬ。これは單に男子ばかりでなく女子でさへさう云ふ場合が尠くない。

斯く自分自身で身を立てゝ行かねばならないから、從て何よりも先づ己れを立て己れを利することゝなる。利己主義の現れ來たるのは蓋し當然のことである。

以上個人利己の兩主義は、社會組織の變動から起つたもので、防ぎ止めることも撲滅することも出來ない、既に撲滅する能はずとすれば之れを如何にすべきであらうか。或はそつとこのまゝ放任して置くべきであらうか。

予は寧ろ此兩主義中に存在して居る眞理を明かにするのが肝要であらうと思ふ。

○個人の自覺は國家隆盛の基

從來の道德は個人の價値を殆んど認めなかつた。即ち人を人として視ることが至つて尠なかつた。人を見る時は何時でも、親、子、君、臣と云ふ風にしてゐた。

我が邦の軍隊教育を批評するのではないが例を擧げてみると、兵卒が不埒を働いた場合、彼等の同僚は如何いふ風に忠言をするか。必ず、貴樣は陛下に對して、それで濟むか、と云ふではないか。

曾て獨逸に居つた軍人の話に、獨逸ではかう云ふ場合に、貴樣は人として恁んなことをしてよいかと云ふさうである。其是非奈何はしばらく措いて、兎も角我邦では人の價値を餘り認めない。だから軍服を纏うてゐる時は如何にも立派な軍人であるが、一度び軍服をぬいで元の虎公駒公に立ちかへると、忽ち曩の立派な品格を失ふて了ふ。是れは畢竟個人の價値を認めないからである。道德上よりするも社會組織上よりするも個人の品格を保ち個人の價値を認めない時は、一家にせよ一個人にせよ、決して立派なものは出來ない。個人主義とは個人相應の權利價値を自覺せしむるのであつて、社會之に依て起り國家之に依て强くなるのである。

兎に角、個人が個人自らの價値を見出して行くのが必要である。

○自愛心は道德の出立點

次に利己主義も同じ事で、家產家祿に依らずして立つて行くときは自然と利己に傾きがちのものである。己れを利して己れを立てゝ行くのは、實際人として爲すべきことで決して惡いことではない。自愛の心は云はゞ道德の出立點で眞に自愛利己の意義が分らなければ從つて愛他利他の意義をも分らない。

抑も利己の中に含んでゐる大眞理は、己れそのものを知ることである。即ち自己の價値、自己の力は何程であるか、利己は如何程の程度までなすべきものかと云ふことを知らなければならぬ。

最も能く己れを利することは即ち最も能く他を利する所以であるといふ、利己の眞意義さへ明かにすれば利己は決して害のないものである。

要するに、利己とは利己以外更に一歩を踐み出して他を利する爲の手段である。

偏に利己にのみ執するが故に、厭ふべき惡むべきものとなるのである。

○理想界と現實界の衝突

個人主義利己主義に繼いで、自然主義の起つて來るのは必要の勢ひである。

今日唱導せらるゝ自然主義はあらゆる外來の束縛を脫し、各人天賦の力を遺憾なく發揮し、飽くまで其慾望を成し遂げんとするにあり。家族本位國家本位を主張して毫も個人の價値を認めない社會にあつては、種々外形上の束縛があつて個人本來の慾望に壓迫を加へる。壓迫せられた慾望は、何時かは、この

束縛壓迫を切り捨て彈ね返さんと、絶えず反抗心を抱いて居る。早く煩はしき外形の桎梏を突破して慾望の向ふまゝに進んで行きたいと思ふてゐる。そうして凭うするのが、天然自然の虚飾のない遣方だと信じてゐる。

更に自然主義の出現を促すに至つた動機が今一つある。すべて家庭社會國家等の教育をするに當つては、自らそこに一定の理想がある。勿論一足飛びに其理想に到達することは出來ないが、兎も角理想があるところがこの理想は往々一種の空たらんとする傾がある。即ち天然自然を離れんとする傾きがある。

古來宗教や、道學先生は常に天然自然と戰つて一個理想に別天地を造り出さんとしてゐる。後世から見ると、彼等は何れも當時の社會や人生を超越した、一種理想家として所謂活きた現實社會とは非常に隔絶してゐて、其間に掛け渡すべき雲の梯は容易く見つからぬ。

この理想界は現實界に對して壓迫となり束縛となるが故に、現實は理想に反抗する。畢竟理想は閑人の空想にして現實こそ即ち天然そのまゝの姿であると云ふことになるのである。從て天然自然のまゝに、現實あるがまゝに、將たまた欲するがまゝに、性慾や慾望を遂げさしてゆくのは、所謂僞のない、自然そのままの行爲であると云ふことになるのである。近來我が國で唱道されてある自然主義は畢竟社會理想の壓迫に反抗して現はれ出でたものであるが、さて飜て此の自然主義が云ふ如く果して立派な結果を齎して來るかと考へると、寧ろ反對に墮落すべき傾向がある。

予の見るところでは、我が儘勝手をするものとのみ解せられた個人主義が、件の自然主義と手を握り、更に己れ自身の利にばかり執する利己主義をも一味徒黨に差し加へ、玆に三者相寄り相俣つて社會に尠からぬ害毒を流されんとし

てゐる。

○偉大なる靈的要求

自然主義者は頻りに現實々々と叫んで居るが社會の現狀にも不自然ある如く、現實生活はそのまゝにては頗る不完全である。

而して我々の心中には、是等のものゝ不完全を知覺して、現狀生活に滿足し得ざるものがある。靈的要求は即ち是れである。個人の價値を認め、價値ある己れを利することは、人間各自の靈的要求中最も偉大なものである。この靈的要求の存在に心づき、飽くまで其力を發揮して行く時は現實生活に滿足することの出來なかつたのを段々と高尚に進化せしめてゆくのである。

凡て性慾を支配するものは、靈的要求である、靈的要求あつて始めて野生の性慾を教化し、向上せしむることができるのである。

之を要する今日社會に害毒を流してゐると誤られたると個人利己自然の三主義は、單に時代思潮に對し一種の反動をして起つたもので、到底積極的に依て以て自ら立つべき、底力のある、大きなものは到底見出しえない。それ故唯消極的に起つて來て害毒を流すに過ぎないのである。勿論多少の參考とするには足るが、さう大した勢力あるものではない。

眞に一代の思想を動かし、現代の社會を導くべきものは偉大なる力の積極的のものでなければならぬ、今日迄に表はれて來た、個人、利己、自然の三主義は畢竟するに自滅するより外はない。

人格の獲得

○唱道せる人格論

路をゆく時ある人イエスに曰けるは主よ何處に行き給ふとも我從はん、イエス彼に曰けるは狐は穴あり天空の鳥は巣あり然ども人の子は枕する所なし、又或一人に曰けるは我に從へ彼いひけるは主よ先づ行きて父を葬る事を容せ、イエス曰けるは死たる者に其死し者を葬らせ爾は往きて神の國を宣めよ、又ある一人曰けるは主よ爾に從はん先づゆきて家人に別れを告ぐる事を容せ、イエス云ひけるは牛を犁に着けて後を顧る者は神の國に當ざる者也。（路加傳第九章五十七節）

キリストは『天國は芥種の如し』と云はれた。これは天國が社會の表面に進

歩發展し行く勢力を譬へたものである。又『天國はパン種の如し』と云はれた。これは天國が社會の內部に於ける敎化の力を譬へたものである。是等二つの比喩は社會に於ける神の國の實現を示すのみならず、同時に吾々個人個人の心內心外に實驗する所のものを、意味する天國は、社會に於て進歩發展すると同時に深く、個人の心中に實現し來るのである。『神の國は爾曹の中にあり』と、キリストは仰せられた。これは神の國が社會の中にありとも、又個人々々の深い心底にありとも取られる。先づ吾々一人一人の身上に神の國が實現し來る狀態を考へて見たい。言ひ換ふれば吾々の身に如何にして人格が發展して來るかを考へて見たい。

近頃人格と云ふ言葉が甚しくもてはやさるゝ樣になつて來た。之は吾々の大に喜びとする處である。世間の思潮はあわたゞしく移り變るのであるが、吾々

は二十有餘年同じ事を主張して來た。それは何であるかと云ふと人格問題である。而して吾々の人格論は當初から非常な反對を買ふたのである。取り分けて神の中に人格の根抵が存して居ると云ふ事は、佛敎徒の反對は固より覺悟の前であつたが、帝國大學の敎授よりも非常に反對を受けたのである。しかるに、いつとはなしに佛敎徒の中に吾々の主張を是認する者が出て來た。そして眞如の一面に人格的なものがあるとまで云ふに至つたのである。人格と非人格と何れが勝つか、最後は如何なり行くべきかは、未だ疑問の道程なれども、吾々は大にその歩武を進めて來たのである。

○人格の修養

一般の社會も近年頻りに人格を唱道し始めた。二十有餘年間の主張が漸く勝利を得つゝあるので、吾々は竊に喜んで居た。最後の勝利も遠くないやうに思はるゝ。

人格といふものは唯哲學上の議論ではない。吾々各自の實驗に基ひする。我日本人も漸く人格の實驗に心付き始めた次第である。尤もまだ淺薄の誹りは免れないが、唯物主義を排してこゝまで進んで來たことは喜ぶべきことである。

日本人も昔から人格の修養を積み重ねて來た。之れが爲めには痛く骨を折り、多くの苦痛を嘗めた。日本の歷史は一面全く苦痛の歷史である。戰爭も單に政權爭奪の爲のみではない。强慾野心の爲のみではない。その際の出處進退について道義の標準に照らし、實に斷腸の苦痛があつた。戰爭はこのたえがたき苦痛を幾らも實驗せしめて、人格の修練をなさせたものである。かの元龜天正時代の武士の出處進退は此邊の消息を示すものである。

○日本の獲得せる人格

此の如くして日本の武士は史上に生れ出たのである。武士が平民に優つて居つた所は此の如くして人格を贏ち得たるに存する。試に其一例を擧ぐれば、武士に二言なし商人は嘘八百と云ふ、何んと大なる相違ではなからうか。而もこの二言なしと云ふ迄に進んで來たのには、幾許の苦しい修養を積んだ事であらうか。嘘といふものは至極便利なものである。一時の遁辭は之にしくものはなからう。その當座を糊塗しておく事も出來れば、幾らでも不便な境を切り拔けてゆく事も出來る。この便利な嘘言を吐く事を止めて二言なしと斷言するまでに至るのには、容易な事ではなかつたらう。又忠義といふも武士が其人格を贏ち得た一である。忠義も他の道德と同じく先天的に完備して居つたものとは思

はれない。日本民族も他の民族と餘り優劣はなかつたやうである。支那の革命戰爭が金錢を以て左右せられ、義烈の精神が乏しいのを嘲り笑ふけれども、何ぞ知らん、元龜天正の時代に於て吾々の祖先が既によく似た事をやつて居たのではなからうか。多くの大名は所領に釣られて動き、家祿の高下に由つて進退を決しなかつた武士は却々多かつたのである。公然金錢とは云はなかつたものの所領の大小祿高の增減が彼等を支配して居つたことは爭はれぬ事實である。されば尊き義烈の精神が生れて、武士の性格となるまでには、幾何の深刻なる實驗を閲みしたか分らない。源平時代には忠孝の眞義がまだよく發揮して居なかつた。日本歴史は忠孝の一大衝突を敎ゆるものなるが、その最も著しいのは蓋し平重盛の一身であらう。人も知る如く、法皇と清盛との葛藤の間に立ちて、彼は進退窮つて如何ともする事が出來なかつた。賴山陽は日本外史にこの

重盛の心事を尊く描き出して居る。これを讀む者誰か涙なしに通り過すことができやう。忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず、重盛は進退谷つて、この解決を爲し能はず終に熊野社に詣でゝ自から死を祈つたと云ふ。この意味の事實は日本の歴史に於てこゝにもかしこにも幾回ともなく繰り返された。支那でも忠孝の問題は容易でなかつたものと見ゆる。孟子にも此問題が提出せられてある。日本の儒者は餘程此解決に困つたやうである。何んとなれば、支那では忠より孝を重しと考へたので、支那道德を標準とした日本の儒者は非常に解決の困難を感じたやうである。然るに日本では聖賢の敎あるにも係らず、孝よりも忠を重しとするに至つた。忠臣藏道德に由れば、君の仇ならば、親の首をも討つとある。又忠臣はその子を勵さんが爲めに自殺して居る。斯く忠を孝に勝たしめて、忠孝を結んで居るのである。この忠を贏ち得るには女子の貞操をも何をも犧牲にして居る。極端には馳せて居るが、此の如くして日本人の義烈なる人格は贏ち得られたのである。この熱烈なる忠君愛國主義を以て新日本は生れたのである。開國及維新の志士は此の猛烈なる精神を懷き、父母妻子を捨てゝ國事の爲めに奔走したのである。梅田雲濱の絶句に、『妻病床兒泣飢、此心誓凝戎夷、今朝死別兼生別、唯有皇天后土知』と云ふが如き、當時の志士が家庭道德をすてゝ、國家道德を贏ち得た事が察知せられる。維新前後より特に發揮した忠君には國家が含んで居る。此國家の爲めには數代の恩顧を蒙れる藩主をも棄て去つたのである。彼等は一時君なく藩なき天下の浪士となつたのである。この浪士の心事には從來の忠君以上のものがあつた。彼等はこの浪士根性と皇室とを結付けたのである。こゝに君國に對する忠愛の至情が沸いて來た。意義ある現代の日本魂は此の如き奮鬪努力を以て獲得したので

ある。忠愛は帝國の大義となつた。この大義の爲めには妻子を棄て父母を滅し、數代の恩顧をも投打ち、又その一身を犧牲となした。此の如く多大の犧牲を拂うて日本の忠愛なる人格は獲得せられたのである。

○眞の人格を形つくる道

これが維新以後になつて俄然として變り、悉く物質界に流れ込んでしまつて、內部から發する尊い精神の力は輕蔑せられ、萬事外部から來るものにのみ眼を注ぐやうになつた。人格の存在は霧の如くに輕んぜられ、金錢名譽地位のみが重んぜらる。嘗て某新聞紙が理想の夫に就て多くの婦人の答案を募つた、處が財產を多く作る事が出來て高き地位に昇り得る技倆のある人を望む者皆しかり。而して依賴するに足る技倆ならば、夜遊位のことは敢て咎めずと云ふではないか。人格は何處にありや、これが明治女子の理想であるが、驚かざるを得ぬ。金錢地位の如き元より論ずる處にあらず、赫々たる義烈の精神あり犯すべからざる高潔なる人格ある夫を欲すると公言した女子は唯一人だに見なかつた。吾々より見れば日本の社會は砂漠の如く見るべきもの更に無し。この間に日本の一部に一種云ふべからざる苦痛と煩悶とを抱き、人格の本領を發揮せんと試むる者は確にクリスチアンである。無論總てのクリスチアンがその人格を贏ち得つゝあると云ふではない、失敗せる者も決して少なくはないのであるが、しかしその奮鬪に奮鬪を重ねて來た事は決して見のがすべからず、無論その主張の要點は從來の忠孝ではない。忠孝は吾々の祖先に由つて既に完成せられた國民道德であるが故に、クリスチアンの奮鬪して開拓した所は他の方面であつた。從つて從來の國民道德から反對せられ又迫害せらるゝを免れなかつた。忠

義の士が不孝の兒と云はれ、愛國の士が不忠と罵られたやうに、クリスチアンが從來の國民道德から排斥せられた事は怪むべきことではない。是れは人格發展上亦已むを得ざる事である。此の如きは反對を怖れて默止すべきものにあらず。偉大なる精神の勃發は火山の噴火する如く、抑へんと欲して抑へ得べきものではない。もし新らしく主張した道德が容易く社會に受け入れられたものならば、それは陳腐の道德にあらざれば、平凡の道德に相違なからう。社會の大なる反對を受くる性質のものでなくば、決して眞の人格を形づくる道とは云はれない。

○吾人の唱道する新道義

さらばクリスチアンの唱道する新らしい道義とは何を云ふのであるか。その二三のものを云つて見るならば、先づクリスチアンが信ずる神は世界萬國の神である。果して日本在來の信仰と衝突しないのであらうか。第一家庭道德と衝突したであらう。從來父は家庭に於て全權を握つて居た。子は父の手打となつても言ひ啓く道はなかつた。しかるに天地の活ける神を認めたる以上は、父の意見が神の思召と相反するときは、從ふを以て却つて不孝とする。又日本在來の忠君と衝突する處がある。昔君は生殺與奪の權を有して居た、その祿を食ふ以上は、絕對にその身を獻げねばならなかつた。しかし君の思召とわが良心に映ずる神の聲とは必ずしも一致するものではない。然らば若し自己の良心を完うせんか、不忠と斥けられんは、覺悟の前でなければならぬ。しかし不忠と斥けられやうが、不敬と罵られやうが、是れは止むを得ないのである。かくなればかくなるものと知りながら止むに止まれぬは我が贏ち得たる良心である。活け

る神に照らされつゝある我が良心は、吾人が人格の生命である。此良心は如何なる苦難が伴ふとも敢て實行せざることを得ない。然れども英斷を以てその大衝突を擊破し得たる曉には、最早吾人の敬神と忠孝とは何等の衝突を感じない。より大なる人格を以て此調和を勝ち得るのである。善と眞と愛の神は吾々をして此の至大なる人格を發揮せしめ給ふのである。

○基督教と一夫一婦主義

吾々の一夫一婦主義もたやすくは勝ち得られなかつた。その主張者は家をなみし國をなみする者と罵られた。孟子は『不孝に三あり、後なきを大なりとす』と云ふて居る。子供がないのが祖先に對する第一の不孝であると云ふのである。されば勢ひ一夫一婦が又は離緣を許す譯となる。この家庭道德に對して吾

吾は一夫一婦を主張する。家族の賊と罵られたのも怪むに足らぬ。國家の上から考へてもこの新道德は大反對を受けたのである。此の如く國家社會と戰ふことは固より容易の業ではないが、それよりも一層劇しき奮鬪を要するものがある。それは我が慾情との戰ひである。男女の慾情は家庭を成立せしむるに必要である。男女の慾情がなくば、家庭は成立しない。しかも戰の當の敵手は此の慾情である。又數多の偉人豪傑を倒したる勁敵である。キリスト教が一夫一婦制の主張を貫く爲には、青年をしてその身を潔く保たしめねばならぬ。自分自分に戰はしめねばならぬ。これは決して容易な事ではない。一方に認むる高い理想は慾情を斷滅し得ない。神は何故慾情を與へしやと煩悶する人は少くない。誠にこれあるが爲めに青年は痛く苦しむのである。女子はこの點に於て古來多くの訓練を經たのであるが、男子は毫も訓練を閲して居らぬ。その不埒その不行

爲は言語同斷である。彼れ男子は公々然としてその不貞節を恣にして顧みない。新聞紙も得意に之を發表して露恥づる處を知らない。吾々の大敵はこの方面に堅壘を築いて居る。この堅壘を陷るにあらざれば吾人の人格は未だ賞するに足らない。吾人は聞く、權謀術數の外交は最早一段落を告げて、今や正義公道の外交時代となり、而してその先登旗手は英國の外相グレー氏であると、その他佛國大統領ポアンカレー氏と云ひ、米國のウヰルソン氏と云ひ、何れも品行方正正義公道を以て治政主義として居る。日本では嘗て某氏が奬學金を作つて、青年俊才の選定を文部省に依頼した時、三つの條件を上げたと云ふ。その條件一は品行方正である、二は體格强健である、三は學力優等であるが、更に但書を附けてこの第一條件はあまり嚴格に要求すれば、合格する者恐らくは一人もあるまい、故に第二第三を重視せよと。日本の學生之を聞いて果して何んと思ふであらうか。大臣、華族、紳士、紳商の品行から之を責めてかゝらねばならぬ。過去の人々は求むるに足らぬ。彼等は儒教又は佛教を以てその修養の標準として、その品行の修らないのは怪しむに足らない。然ども キリスト教が新しき道德を示した以上、最早從來のまゝにてはすまないのである。日本帝國はいつまでも舊い道德に拘泥して、毫も改善せられずしてよからうか。之は吾吾の責任問題である。基督教の道德が國民の精神的要素とならざる以上は、何時までも昔時のまゝの慾を脱することは出來まい。來るべき精神的新日本は基督教の道德に待つこと多大であらう。之に由つて日本史上未だ曾て見ざりし純潔なる一大人格が獲得せられるのであらう。

○國民道德に衝突する大精力

更に烈しく從來の國民道德に衝突する一大精力が吾々の中に動いて居る。宇宙の神を信じたる結果として、吾々の中に千古未聞の精神が發して來た。それは博愛の精神である。この閃めきとも見ゆるは時々史上に顯はれなかつたではないが、單に閃めきとして止つた。博愛はまだ吾が國民性の一大要素とはなつて居らぬ。二千年の史上弘法あり、親鸞あり、日蓮あり、道元あり、而も誰か博愛の精神を日本國民に鼓吹したのであらうか。彼等は釋尊の弟子であつた。大慈大悲を說きながら、海外を撫育する博愛の精神を示さなかつた。吾人は敢て之を責めやうとはせぬ。今や吾々の中に博愛の精神は日月の如く昂つて來た、之が爲めには恰も國賊視せられたのである。然れども吾々の人格はこの衝突にて磨かれ、又成長し、今日となりては大に我が同胞に認められて來た。敎育勅語の博愛は戊申詔書に由て、近頃大にその光輝を放つのたである。

吾々クリスチアンの精神は漸く社會に認められ始めたのであるが、之は吾々の本領が社會に讓歩せられたが爲めであらうか、斷じて然らず、さう誤解してはならぬ。吾々が社會と妥協したなど、斷じて誤解してはならぬ。吾々は自らの本領を貫徹するに於て、社會に對して寸毫も讓りはしない。個人の價値を保全するに於て、一夫一婦を主張するに於て、男子の貞操を要求するに於て、博愛の精神を唱道するに於て嚴格に神の威嚴を尊重するに於て、一毫も舊來の道德に讓らない。過去數十年社會は漸々吾々に接近して來たのである。たとへ未だ實行の域に至らずと雖も、その論旨に於て吾々に贊成を表し初めたのである。決して決して吾々が信仰上讓歩したのではない。

○眞理の傳播と努力

兄弟姉妹よ、吾々は社會に一歩も讓るべき理由を持たぬ。眞理を傳播するに當つて何故に讓歩する必要があらうか。もし一歩を讓るならば、それは吾が人格の一角が破壞せらるゝのである。恐るゝ勿れ、撓む勿れ、正々堂々と鼓を鳴らして進むべし。吾人が信ずる錦の御旗は吾等が手に授けられつゝありと。力を盡して飽くまで奮闘しなければならぬ。正々堂々と少しも躊躇する所なく、愈々吾々の本領を發揮し、同時に自らの人格を形成し、之を以て神に奉仕し、君國に奉仕し以て上、祖先に報ひ、下、子孫の爲めに道を啓かねばならぬ。吾〳〵の人格は深く國民二千年の歴史に根ざし、その苦悶奮闘の精神より生れたるものである。命は一代、名は末代、命は鴻毛より輕く、義は泰山より重し、主

君の爲めならば、親の首打つも本意と喝破したる苦悶奮闘の精神に吾人が人格の根抵は据つて居る。祖先が吾々に殘したる人格の根據を深うし、更に幾許の人格的要素を增加して、之を國民性の一大部分となす。こゝに祖先崇拜の眞が潜んで居るのである。吾々の奮闘は國民性の內容を豐富ならしめ、深大ならしめ、同時に猛烈ならしめ、純潔ならしむるにある。吾々の奮闘は祖先の歴史を完成し、更に將來に向つて國民的精神を啓發するものである。こゝに天國は實現し來るのである。吾人がクリスチアンとなりたるは此大なる使命を果さんが爲めである。神の國は個人の人格と國民の人格とを通じて實現し來るのである。

宗教の本領

○青年と宗教

從來宗教と云へば最も年長けた者の冥土の土産に持つて行くものゝ如く、最早世上に於て爲すべき仕事がないので、幸に閑散の身となつたから未來の用意をすると云ふ譯になつて居たのである。是は實に大なる間違であつて、實は宗教は青年が最も熱烈に信じなくてはならぬところのものである。昔から大宗教を開いたところの人々の跡を見るに決して老人ではない、二十歳代、三十歳代である。而して其人々の宗教思想は既に十代に起つて居るのである。東洋に於ける釋尊の如き人も其宮殿を棄て雪山に這入つたと云ふ、其時はやつと二十歳を越へたかどうかと云ふ頃のことで、或傳說に依ると未だ二十歳に達せざる人

のやうにも考へられるのである。兎に角年の若い時のことである。而して基督の事を見れば誠に年若い時であつて、其人が世間に現はれて道を說かれたのが僅に三十と云ふ位なことである。或は名僧知識若くは西洋に於けるとこの宗教家ルーテル、ウエスリーなどと云ふやうな人々は、何れも年若い時代である。其學校時代に於て既に宗教心を起して居るのである。近頃心理學者の云ふところに依つて見ると、宗教心は十三四歳から十六七歳の間が一番勃興し易いのであると云ふのである。予などの實驗に依つても年若い時に宗教心は起つたのである。今日本に於ける基督教の先輩と云はれる人々を尋ねて見るに、何れも青年時代からの宗教家である。傳道に從事してから最早三十年からの年月を經て居る人々である。而してこれ等の人々は未だ十代にして基督信者になつたところの人々である。殊に春秋に富めるところの青年は種々樣々の思想を有つて居る

のである。希望を有して居るのである。從つて誘惑も多いのである。何や彼やさう云ふところのものがあつて、問題も亦群らがつて居るのである。是等のものを解決するには往々神經衰弱になると云ふことである。併し神經衰弱になる人が宗教家になる人と云ふのではない。夫れ位骨の折れる時代、さう云ふ時には矢張り宗教にも熱烈になるものであると云ふのである。筋骨逞しく精神熾んなる人が其宗教の情熱も熾ゆるのである。であるから青年は宗教に餘り關係のないやうに考へるのは大變な間違である。

○宗教の研究

近年になつて歐米に著しい現象が現はれて來たのは各種の青年會である。或は市青年會、學生青年會、或は何々青年會となか〳〵盛んなもので、是が歐米に於ける一つの著しい運動である。何處の市に行つても何處の學校に行つてももう其青年會が組織されて居て、さうして盛んにやつて居るのである。畢竟此の宗教と云ふはどんなものであらう、或は青年或は老人、總て是等の者に多大の興味を置かしめるところのものは何であらうか、又老若の別なく男も女も同じく意を其處に注いで行くのであるが何だらうと云ふことは爲と研究をしたところのもので、是には多くの學者が多くの時間と勞力とを費して研究したのであつて、今や吾々其結果を聽くことが出來るのは非常の幸である。で此の極く野蠻の宗教、又極く古代の宗教、それから現代及び此のものと文明の民族の中にある宗教を比較的に研究したものである、何か之を貫いて居るところの一つの要素はないかと云ふのであるが、たゞ之に付いて云つて置かなくてはならぬのは、何うも此の教宗を論ずる上に於て學者が往々誤つて居るところがある事

である。其宗教の極く初めの謂はゞ野蠻人の中に入つて研究し、或は古代に入つて研究して、そして此處に宗教の本があると云つて居る。それは本には相違ないのであるが、それを以て直に宗教全體と思ふと非常な間違である。之に引替へて最も文明なる最も偉大なるところの人物の其頭の中に存して居るところの宗教はどう云ふものであるかと云ふと、それは雲泥の相違がある。殆んど同一のものとは思へない程に變つて居る。宗教には非常な進歩がある、一つの生命であるけれども、併しながら其初めと後とは非常な相違があるのであるから吾吾は其初めに遡つてばかり見ると間違を起すのである。例へば此處に人間と云ふ者はどんなものだと云ふことを研究するのに、赤ン坊を捉へて是が人間であると云つたならば間違ふであらう、赤ン坊と云ふものは物を言ふことも出來ない、働くことも出來ない、無論歩くことも出來ないのである。是が人間である

と云つたら大變な間違ひ、それと年齢三十歳にもなつて居るところの者とを比べて見れば殆んど同一ではない、其通り相違して居るのである。又同じ樟を研究するのに樟の實とそれが苗になつて而して亭々として空中に聳えて太陽の光を侵すと云ふ位になつて居るところのものとは到底同一の論ではない、一樣に見ることは出來ない。併し同じ生命である。さう云ふやうに極く下等な人種の中に現はれたところの宗教の姿と、極めて文明して居るところの民族の中に現はれたところのものとは同日の論でないのである。極く下等な所に行つて見ると極めて單純なものである。

○宗教の進歩

二つある其精神狀態が一つは怖いと云ふ恐しいと云ふ一種の感想の中に宗教

が現はれて居る、一つは有難いと云ふ心より賴むと云ふ其心持の中に宗教が現はれて居るのである。一つは有難いと云ふ心より賴むと云ふ其心の中に宗教が現はれて居るのである。其怖いと云ふものは何を怖がつて居るかと云ふと禍を怖がつて居る、其有難いと云ふのは何かと云ふと幸である。人生に於て最も厭ふべきものは禍である。最も好ましいものは幸である。其好ましいものを厭ふべきところのものに付いて宗教心が萠して居る、所が其幸と禍とが偶然來るに非ずして、何物か自分以上のものがあつて、或は禍を授け、或は幸を授けるのであると斯う考へて居る。宗教には自分より以上のものを認めて居る。それが何物と云ふことは非常な相違があるけれども、兎に角幼稚なものとして自分より以上のもの、決して自分より以下のものを崇拜して居らない。成程今日から研究して見ると人間が鳥や獸類を拜むなど〳〵云ふことは馬鹿〳〵しい話であるけれども、幼稚な人間から考へて見ると、往々鳥の方が人間よりも偉いと思つたことがある。例へば鷲のやうなもの、何うも人間よりは偉いと思つた。何故ならば人間は空中を飛ぶことが出來ない、鷲は空中を飛んで彼の大空を翺ける と云ふやうな譯であるからして、是は偉い不思議なものだと斯う思ふのである。虎の如きも恐しいもの、是亦人間よりも偉いと思つた、それは其筈で人間を嚙殺すものであるから人間が未だ虎に勝つことが出來なかつた時代は虎を大に尊敬して神だらうと云ふ風に思つた。何でも是は偉いものだと云ふやうに思つて居た。或は狼のやううなものを「おほかみ」と云ふのであるから、餘程日本人は昔狼を怖がつたものと見える、恐らくは拜んだのであらう、と云ふやうな譯で澤山ある。雷鳴を(かみなり)と云ふから、あの鳴るのは恐しく怖かつたものと見える。今でも怖がる者があるから昔は嘸怖がつたであらう。それで神鳴と

云つて居る。何でも神と云ふ言葉が付いて居るのであつて、蛇までも矢張り神として拜まれたものである。決して拜んだところの人が自分より以下の鳥獸類蛇と思つて拜んだのではない、其中に一種不思議なる魔力があると思つて拜んだのであるからして、それでどんな下等なものを拜んだにしても、拜んだところの人の考へは幼稚な考へである、迷である、間違である、けれども其者の考へには自分よりも偉い力が向ふにあると思つて居たに相違ない、而して其力は一種支配するところのものがある、何故ならば自分に幸を與へやう、或は禍を與へやうと云ふ、其幸を奪ふことも出來る、又禍を除すことも出來る、さう云ふところの權力がある、斯う云ふ考へを有つて居るのである。所が是は極めて幼稚な時代であつた、今でも亞弗利加邊の蠻人の中に行つて見ると斯う云ふやうな宗教の面影がある。日本にも澤山ある。此日本と云ふ國は面白い國で誠に宗教が雜居して居る、種々の宗教がある、日本國民は宗教の博覽會をやつて居る、極めて高尚なものもあれば、極めて下等なものもある、別に狐などを拜む譯ではなからうけれども、狐を神樣のやうに思つて居る者も居る、未だ田舍などには斯う云ふ人が隨分澤山に居る、是は何うも不思議なものである。斯う云ふやうな譯であつて隨分奇妙奇態のものがある。能く取調べて見るとそれは誠に可笑しいことなのである。斯う云ふ風で、丁度人心が雜駁であるやうに宗教も雜駁である。併し乍ら今云つたのは極く下等なものであつて、もう少し高尚になつて來ると恐るゝと云ふことが今度は餘程道德的になつて來る、敬ふと云ふものに變じて來るのである。英語で云ふならば「フエヤー」と云ふのが「レグレンツ」斯う云ふやうになつて來る。即ち敬ふと云ふ畏敬と云ふ言葉がある。畏敬ふと云ふと唯ブル〳〵慄へて怖がると云ふことではない。敬ふと云ふこと、是

は非常な高尚なもの、それから此感謝する、或は信賴する、任せると云ふことが稍々一變して來て柔順、順ふと云ふ意味が道義的になつて來る、職分と云ふやうなものを感じて來るのである。それで色々さう云ふものが發して來て宗教心の中にそれが出て來るのである。自分より大なる者に對して敬ふ、確なる者に信賴する、さうしてそれに順ふと云ふことが起つて來るのであつて、宗教は確にさう云ふやうな要素があると云ふことは間違のないのである。

所が此處に其人間の成長して行く上に於て人間の中に偉大な力が宿つて居るのであるから、それが出て來ると今度は其矢張り自分が昔拜んだところの神々を怖がるやうになつて來る。さうしてそれから免れやうとして來るのである。反對をするのである。是がなか〳〵又面白いところである。實は自分が拜んで居たところのものと精神的に戰爭を始める、是が其宗教の發展して行く所以である。

ある。何でも發展して行く時には自分が前に拵へたものを打壞してさうして今度は更に新なものを見出して行くのである。前に怖がつたものを怖がらないやうになるのは何でも其通りであるが宗教に於ても其通りである。さうして自由を得やうとして大變不自由になつて來る。神に從順を止めやうとして自分が誠に情慾の奴隷になつて仕舞ふ。所謂信心を打壞して仕舞つて精神的に自守獨立にならうとして實に救ふべからざる墮落奴隷に陷つて仕舞うと云ふことになつて來るのである。さうしてそれで仕舞になるかと云ふと、斯の如くして居る中に又更に深いところのものに徹底して其大なるものを見出して來るのである。斯樣にして段々進歩して行くのである。

○宗教とは何ぞや

此宗教は何であらう、何う云ふ精神狀態であらうかと云ふと、矢張り自分より上なるものを自然と見出して行つて、それを自分が取らうとするのである。故に宗教心の中には自分より大なるものを自覺して其大なるものと自分とは深い關係のあるものと云ふことを自覺するのである。其大なるものを自分のものとすることが出來ると云ふ程の深い自覺をして來るのである。さうして其大なるものは何であるかと云ふことは人間の知識の明かになるに隨つてそれが明確になつて來るのであつて、詰りどう云ふ所に來るかと云ふと、近代、否其最も啓發したるところの宗教に依つて見ると、其宗教には此二つを確つかり握つて居るものがある。それは何かと云ふと眞理である、眞理と云ふのが分らないものである、なか〳〵分るものではない。眞理と云ふことは口で云ふて居るけれども、眞理とは何ぞやと云はれた時には一寸分らないけれども、人の心の中に眞理と云ふものが必ずあると云ふところの信念、是は打消すことの出來ないものである。それは人間の理性と云ふものがある以上は此眞理と云ふものゝないと云ふことは出來ないのである。人間は一つ何物かを智識の上に探して行きつつある、深く索めて行きつゝあるにも拘らず其根抵に突當らぬ限りは安心が出來ない愈々研究すれば研究する程其原理に入つて行つて、而して一定變らざるところの普通原理總括するところの根抵に立到らうと云ふことは自然の精神的の要求になつて來るのであつて、自然となつて來る其要求から其一つの根抵を握らう、其所謂原理を握らうとする、其理の至る所に眞理がある。總ての物を統一して行くところの精神的、智識的滿足を得やうとするものがなければならな

ぬと云ふことが人の自らの信念である。眞理を知る、それは研究をすれば大變面白いが、長くなるからザッと述べて置く。

もう一つは我々が日常の行爲は何か一つの目當を付けてやりつゝある、やりつゝあるがそれで滿足しない、それは又先きの何物かの方便になつて居る、それも亦向ふの方便になつて居る、始終我々が物事をやつて行くのに終局の物をまだ握られない、其終局の目的を達するための方便になつて居る。それであるから多くの事が段々實行を積んで行くと斯うして行かなければならぬ、彼處が終局であると云ふことが欲しくて堪らない、其終局になるものがあるのである。是は行爲の上から云ふのである。之を名付けて善と云ふのである。我々の智識の上からは一つの眞理に達したい、我々の行爲の上から云ふと善と云ふことに達したい、所謂至善眞理は實に極意の所のもので、其根抵と善とは人間が唯妄想して居るのであるかどうか、妄想して居るのなら我々の學問でも研究でも、我々の修養でも實行でも皆是は妄想である。何の爲に修養して居るのであるか何の爲めに克己して居るのであるか、何の爲めに人格を磨きつゝあるかと云ふ問を出して其根抵まで行くのに何ものか理想とすべきところの終局がなければならない、それがない、それは嘘だ、斯くなつて來れば何の爲めに修養して居るか、何の爲めに人格を磨いて居るのであるか、實にそれは空中の樓閣に外ならないのである。そんなことに化されて汗水流して食ふ物も食はず、眠る眼も寐ずして骨を折ることは是は何だと斯うなつて來るのである。それで其處は人の心を叩いて見る時にはイヤ是も爲すべき道である、何の爲めに爲すべきものであるか、是は斯うと云ふて先を見て來る、其終局の善は實在でなければならぬ。其實在と云ふは人の心の中に何うしても安んじられないところの根據であ

る、眞理は實在なり、善亦實在なり、故に眞善と云ふことが最も確なるところの實在である。之を名付けて神と云ふて居る、佛教などでは佛と云つて居る、名は何でも構はぬ、其内容其性格は眞なるもの、善なるものである、其眞なるものと善なるものと、我とは深い切つても切れないところの緣がある。本來一なるところのものである、それを自分が自覺して而して此處に眞なるものを見出して、善なるものを實現して來た時は、其處に立派な本統の安心が得られ、本統の滿足が得られると云ふのである。

宗教とは何ぞやと云ふと、宗教とは此眞善を自分の人格に實現しやうとするところの熱誠である、至誠である、是が宗教である。余などの實驗するところのものは之に外ならぬのである。なか〳〵それをやらうとするのに骨が折れる。所が唯此方からばかりさうして行くのであるが、此眞善の實在する向ふに於て我に對するところの何物か貴いものがありはしないか。ある、即ち自分は唯向ふの客觀的實在が我に及ぼすところの感化がある、大なるところの感化がある。而して我にあるところのものと向ふにあるものと、宇宙の實在と我と精神的に交渉して行く、其交渉の所に貴い宗教を自覺するのである。其信仰の上から云ふならば、其宇宙の實在が我をして必ず眞善の極に到らしめ給ふことの出來るものであると云ふことを信じて行くのである。又其力を自覺するのである。其處が宗教である。宗教の實質は其邊に存して居るのである。それで基督教であらうが、佛教であらうが、其外の宗教であらうが、其實質の幾分かを皆有つて居るのである。唯それを能く最も適當に實現して行くのは是は又其處に宗教の異つて居るところにあるので、大に宗教を選ばねばならぬ譯合になつて來るのである。

○日本民族と先祖崇拜

今世界に現はれて居る宗教では佛教と基督教が一番大きなもので「マホメット教」もあるけれども「マホメット教」は基督と間髪を容れないところに爲つて來て居るのである。餘程近いものである。併ながら違ふ方から云へば、非常に違ふものがある、先づ世界的宗教と今日云はれるは基督教と佛教とである。此宗教問題といふ手近い實際的問題には個人問題だけに止まらない、是は民族問題に大關係がある。予は此民族問題に大關係ある所を少しく述べて參考にしたいと思ふのである。日本人の此民族的精神に宗教が非常な深い關係のあることを予は此所で述べやうと思ふ。

それは何う云ふことであるかと云ふに、一體日本國民が是から世界に發展し

て行くに從來の宗教心で宜いか何うかと云ふ。日本人は此を眞善と思て居るか何うか知らないけれども、日本人の宗教は之を要するに祖先崇拜である。佛教が日本に這入つてさうして非常に擴まつた。併ながら日本人の祖先崇拜は打壞して居らない、是は佛教で打壞さなければならぬところであると予等は思ふところであるけれども打壞して居ない、儒教が日本に這入つて來て祖先崇拜を打壞して居らない、是は儒教は祖先崇拜の國から來たものであるから打壞すことは出來ない。儒教あり、佛教あつて、日本の祖先崇拜を打壞さない、其處に神道の力が存して居る神隨の道が存して居る。日本人は何處までも矢張り祖先崇拜で是迄通つて來て居るのである。其日本人の御先祖は何處にあるかぼんやりして日本の神々八百萬の神々と斯うして見ない、日本には八百萬の神々があるけれども、日本人の祖先崇拜の中心は八百萬の神で漠然云ふことは出來ない。

それは今日迄の日本人の意識に訴へて見たならば伊勢の大廟である。此處は最も神聖な所、神聖な所を予が論ずると云ふは餘程予も大膽である。併ながら此處は日本の御先祖で、從來の日本國民は此祖先崇拜で今日在るを得て居ると予は思ふ。

前に云つた通り此宗教と云ふは人の心に有難いと云ふ心を起さしめるものである。それから信賴の心を起さしめる。それから所謂尊敬を拂はれるところの力を有つて居るところのものであるが故に、宗教と云ふものは、人心を纏むるところのものである。故に宗教の衰へる時には此人心が離散する時である。宗教が明確になつて來る時には人心が集つて來る時である、團結して來る時である。是は世界の歷史に照して實に明確なものである。我日本の昔からの狀態を見ると、何時でも日本人が團結をする時には伊勢の大廟である。彼處に存して居る、彼處は最も神聖なる所である。

日本人の頭の上に最も神聖なるものが彼處にあると云ふ考、故に何時でも國家運動が出て來る時には伊勢の大廟である。太神宮樣、國家運動が出て來る時にはもう彼處を離るゝことは出來ない。彼處は日本國家のどうしても中心になつて居るのである。彼の日蓮大菩薩の如き人が出て來て非常に日本魂を主張する時に矢張り伊勢の大廟を離るゝことは出來ない。彼處は實に大切な所である。蒙古襲來の時に神風の吹いたと云ふ所は何處から出て來るかと云ふと、伊勢の大廟から出たと云ふ、さう信ぜられて居る、其は勿論民間の傳說であるけれども、さう云ふ風に考へられて居る。それから三百の大名を統一する時に何う統一する、それは皇室だと云ふであらうけれども、其根抵がある。それは伊勢の大廟、王政維新前に日本に今云ふ神道なるものが勃興した。黑住教とか禊

教とか色々澤山勃興した。皆伊勢の大廟である。皆太神宮様を崇拜する、それが神體は太神宮様、さうして起つて來た。即ち王政維新と云ふものゝ裏面、精神的裏面を見ると大神宮様である。そこでないと人心は纏らない、其處へ來ると三百の大名も別々になつて居るものは打つて一團となつて來ることが出來る。

此太神宮様で王政維新は出來て居る。さうして其後に日本が纏つて行くのは此處にある、何處までも此處に存して居る。さうして此日清戰爭の時も其處である、日露戰爭は殊にさうである。皆日本の將校達が伊勢の大廟にチャンと心を注いで居たのである。是が日本民族の實に團結して行くところの中心である。皇室は此伊勢の大廟と最も深い關係を有つて居る。此伊勢の大廟は概して云へば皇室の御先祖であり、同時に日本民族の御先祖である。祖先崇拜と云ふことが確に日本人の今日在るを得て居るのであるが、是は日本に限らない、皆昔の民族はさうであつて、希臘もさうである。羅馬もさうである。其外の民族は皆其時代が一つ、さうして其祖先崇拜で國を成して來たのである。今日迄斯うなつて來て居るのである。

所が此民族の今日斯う團結して來た所には其處に非常に大切なものがあるが、我日本民族は今や此處に一轉し掛つて居る時である、大發展をして來た時である、それが此處でいけるかいけないかと云ふ、是は一つの考、歐羅巴諸國を見ると元は眞祖先崇拜の國である。所が或時代に於て祖先崇拜のことを止めてしまつた。さうして即ち其眞善の活ける神を拜むやうになつた。そこで腹の根抵を定めるやうになつて來たのである。宗教の實質を此處に最も明かに見出して來たのである。眞善の實體を見出したのである。其處へ其根抵を据へてさ

うして民族が各々發展して來て居るのであるからして、歐羅巴諸國は國は別々であるけれども、民族は別々になつて居るけれども、其根抵を叩いて見ると其裏面の宗教は一つである。矢張り眞美の實體を神として居る、獨逸の基督教も英國の基督教も露西亞も伊太利も墺太利も佛蘭西も天主教「プロテスタント」を問はず其處は一つである。日本は今其處に來て居る、どうするかと云ふ此問題は大問題である。吾人基督教を主張して居る者はとうから之を主張して居るのであるが、未だ民族全體の耳に是が這入らない、老人には餘計に這入らない、日本が之から大發展をして行くのに祖先崇拜で行けるがどうか、此處で一轉せねばならぬかどうかと云ふ問題である。是は大問題である、予は憂國者の一人として、又諸君は此憂國の人として愛國者として予は此處に此問題を提出するのである。

諸君、考へて見よ、宗教を考へる時には是は國民として考へなければならぬ、唯一人〳〵ばかりではない、今は一人〳〵ばかり考へるが、我々が宗教を信じた時は國民的の見地から基督教を信じたのである、今迄それて通して來て居る、勿論一個人は忘れて居らぬ、予は斯う云ふやうに考へた。先づ一面を見ると祖先崇拜で行つても、もう今日は本統の團結が出來るかと云ふのである。例へば手近い朝鮮、朝鮮の千萬人からの人民をば我日本人の中に入れた、是は我々祖先崇拜で此朝鮮人を同化することが出來るか出來ぬか、若し祖先崇拜を論ずるならば朝鮮人には朝鮮人の祖先がある、日本人には日本人の祖先がある譯である。お前はお前の神を拜め、私は私の神を拜むと云ふことになつて來るのである。さうすると其根抵はどうしても一つにならない、矢張り別々のものである。別々なものを唯法律上斯うして幾分か一緒にして居るけれども、其精神狀態は

別々である。斯の如き狀態となつて行かなければならぬ。是から滿洲に日本が若し發展をして滿洲人を日本の帝國内に入れると先づ察して見る時に何うであるか、祖先崇拜と云ふもので滿洲人を同化することが出來るか出來ぬかどうであるか、又臺灣は既に日本の領地になつて居るが、舊の支那人が澤山に居る、何百萬と居る、若くは土人、是が段々文明になつて來る時に祖先崇拜で同化することが出來るかどうであらうか、是はなか〳〵むづかしいことである。さう云ふことでは迚も予は出來ないと思ふ。何故ならば精神が違ふ、どうせ其一つ精神から同一になられる所を即ち此共通の所を見出して來ないでは予はならないと思ふ。此處が宗教の世界である。政治家も此宗教のことを考へないと飛んだ間違を仕出す、昔歐羅巴の政治家は多くは宗教家である、なか〳〵宗教には興味を有つて居る、それが分らぬでは人心が分らない、羅馬などは何うであるかあれだけの偉いことをやつたのは諸君が知つて居るであらう、一は宗教の力、どんな面白いことをやつたか、それは自分を滅した神々を羅馬の七宮の所へ皆捕虜にして持つて來て其處へ祈つた。なか〳〵是も政策としては偉い政策である。人心を斯の如くにして纏めたのである。日本の政治家でそれだけやられる人が居るであらうか、些とはそんなことも考へなければいけない。それで何うして之を纏めて行くか、是から日本は一面には征服して行くところのものをどうして纏めて行くか、忠君愛國で以て行く、それは一の方法、忠君愛國だけでは精神的には行かない、もう些つと根抵がないと、共通したものがないと行かない、何時までも我々の民族は違ふ、我々の祖先は違ふと云ふことではどうしても駄目である。何うしても之を打つて一團とするものがなければ駄目である。即ち共通の信念を持たさなければならぬ。共通の信念は何であるか、予は思ふ、

善の實在、眞理の實在、是は所謂至誠である。苟くも自分の肉體の先祖がどうか、と云ふことではない、苟くも良心を有つて居るところのもの、苟くも理性を有して居るところのものゝ理想とし、又は尊敬せねばならぬところの其唯一の實在、其處に於て結ばると云ふことである。此根抵がある、是ならばどんな民族の異つた者でも結付けることが出來る、それが一つ、それからもう一つの方面に非常に大切なことがある。

○日本人發展と宗教

それは何かと云ふと例へば日本民族が彼の亞米利加のやうな所へ行く、向ふへ移民して行く上に付いて、今日は移民問題も無茶苦茶になつて來たやうな時であつて、時勢後れのやうであるけれども、未だ南亞米利加にも移民を是からやるやうになるであらうから是は問題である。外國に移民をして行く、さうして向ふで土地を所有し、盛にやつて行くと云ふことに於ては、歐羅巴人のやり方と日本人のやり方が違ふ、どちらが成功して居るかと云ふと、今日迄は歐羅巴人が成功して居る。其例は北米合衆國で分る、北米合衆國はあれは昔英國の殖民地であつて、「アングロサクソン」の世界であると多く云つて居たのであるけれども、それは時勢後れの觀察、北米合衆國は歐羅巴の「エキスパンション」である。歐羅巴の彼處は擴がりである。昔は英國の擴がりであつたけれども、今は歐羅巴の擴がりである。故に今はまだ亞米利加はどの民族の手のものになるかは疑問である。今日迄は「アングロサクソン」であるが、將來誰の手に移るかと云ふことは未だ疑問である。何故なれば彼處には獨逸人が既に一千萬這入つて居る、大したものではないか、人口の八分の一ばかりになつて居る。故に

今日は北米合衆國の國柄はどう云ふものであらう、北米合衆國と亞米利加人とはどんなものであらうと云ふことを研究するには獨逸民族を研究しなくてはならぬ。昔は英國民さへ研究すれば分つて居る。それと和蘭人を些つとばかり研究すれば分つて居る。今は獨逸人を研究しなければ分らないのである。それればかりではない、彼の伊太利人も既に七十萬人から此合衆國人になつて居るものもあるさうである。もつと殖えて居るかも知れない、もう問もなく百萬になるであらう、是はゑらいものである。さうして米國を研究するには伊太利人と云ふものを研究しなければ分らないやうになつて來て居る。斯う云ふ具合に歐羅巴から年々歳々亞米利加へ移民して行きつゝあるのであるが、盛んなものである。中原の鹿は誰の手に落るか、どの民族の手に落るかと云ふことは今猶問題である。此時に於て獨り日本人が排斥を食つて而して辛うじて「カリフオルニヤ」に居る日本人はもう永住はなか〳〵六ケしい、彼處の永住は覺束ないのである。さうなつて來つゝあるのである。何故であるか、人種の異なる所以と云ふ、さうではない、人種の異つて居る所以なら日本人よりも甚しいところの黑ン坊が居るではないか、初めは四百萬ばかりだつたけれども是も今日は殆ど千萬から居るであらう、予の見る所では人種論ではない、何であるか、何故日本人はそんな悲境に陷つて行きつゝあるか、諸君はお分りであらう。何故か、それは市民權を持たない、否市民權を取らない、欲しなかつたのである、歸化することを欲しなかつた。今より二十五年三十年前に既に此移民を始めた、さうして亞米利加人にならない、亞米利加の歸化權を取らない、此點に於ては政府の役人ばかりが構はなかつたのでもない、此役人も實に妙である、予が考へて見ると、其處は外の議論にする。それから人民のことも考へなければならぬ、

兎に角ない、極く少ない、何でも予の聞く所に依れば三十人か、そこらは居るであらう。併ながらそれは皆隠れて居る、何處に居るか分らない、寧ろ何んだか影を隠したやうにして亞米利加で生活して居るらしい、大多數の日本人はならない、さア何うである。ならなければ投票の權はない、政治界に爭ふことが出來ない、何等の權力がない、さうして歸化權を有て居るところの者はドシドシ成功して居る、獨逸人でも盛に成功しそれから伊太利人が極めて多い。さうして日本人は始終排斥せられ通し、何等の權力がない、排斥せられざるを得ない、排斥せられる理由も向ふから見たならばあるが、それは外のものゝ支配であるから此方は往けぬ、何故か、それは向ふの者が選擧權を有つて居る、此方はならない、それで今日の如き悲境に陥らざるを得ない。予は先年行つた時に是は何うしても君方歸化しなければ行かぬぞと云つたけれども、却つて歸化せよなどゝ云ふことを云ふと、賣國奴のやうに、何だか愛國心のない者のやうに考へる者が多い。駄目である。何う云ふ譯で歸化しないか、此處は問題である。此問題は單に政治上の問題ではない、是は宗教問題である。祖先崇拜を旨として居るところの人民が自分の祖先の國に別を告げて而して他國に全く移つてしまう、籍を移してしまう、自分の祖先の國を棄て他國に行つて此國の爲めに私は忠實を盡しますと云ふところの忠君愛國の誓を爲してさうして其國民にならうと云ふことは出來やうか、果して諸君は如何に思はるゝか、祖先を大切にして居るところの者が、他の國に行つてしまつて、さうしてまさかの時には祖先の國へ弓をも引かねばならぬやうな境遇に置かれることを甘んずるか何うであらうか、是は大問題である。それで此他國に行つて斯の如き開墾地に行つて鹿

を中原に爭ふやうな所に歸化權をも欲せずして居る者は其處に到底成功者となつて、さうして勢力を得ることの出來ないことは明かである。我日本民族が偉大なる國には發展が出來ないと云ふことは是で定まるのである。どつちがよいか、獨逸人が彼處に自分の本國を棄て來て其處へ移住して市民權を貰つて誓をして此國民になると云ふことの盟をしてさうしてドシ〳〵增して其處に勢力を有つて居ると云ふのと、日本人はそれをせぬと云ふて段々自分で退かなければならぬと云ふ風にせしめられて居る。予は國家問題として向ふの人のやることが善い惡いと云ふやうなことに付いて公平の判斷をする。どうである、予は今日本人の爲めに辯護するのでも何でもない、是は唯研究問題として出す。若し北米合衆國人が日本に來てズッと此邊から東海道筋に、先づ一萬と假定する、一萬の米人が土地を買ひ山を買ひ仕事をして盛にやつて成功してやつて行く、決して日本に歸化はしない、萬一の時には米國の爲めに自分の一身を献げて戰ふと云ふ氣性を有つてドシ〳〵土地を買つて成功して行くのを諸君は傍觀するであらうか、諸君は實に寛大なる態度に於て傍觀するか知れないが、余は是は排斥する、斷乎として排斥する、予は日本國家の運命を考へて排斥せざるを得ないのである。さう云ふものが殖えて來るならどうしても是は排斥せざるを得ない、歸化權を欲せぬとところの者が增すと云ふことは是は考へものである。北米合衆國の人のやり方は予が見る所に依つて見ると此邊に深く考へて居る、勞動問題がどうか、と云ふのは邪推である、國民的問題があると思ふ。日本人が之を不當と思ふならば戰爭してもよろしい、それはやるもよろしからうけれどもそれは大變である。それで今南亞米利加の方は未だ何事もないけれども早晩又來る、日本人が向ふへ移民地に行つて此歸化權を取つてさうして其處を開

いて行く氣にならない限りは排斥は免るゝことの出來ないのである。然らざれば予は世界何れの國に於ても排斥されると思ふ。若し排斥しない者が居たならば弱い民族である、日本人よりも遙に弱いものであつて、日本に壓せられて居る民族であれば格別、さもなければ皆排斥しやうとして居る。それで是は何處に根抵があるかと云ふと今云ふ祖先崇拜、——祖先崇拜を旨として居るものが何うしても他國に歸化をすることが出來るか、精神上に歸化をすることが出來ない、そこで是は宗教問題からどうすると云ふ、イヤどんなことがあらうが、祖先崇拜でやつ付けてしまふ、是が日本の國體だから是でやると云つて貫徹するか、若くは我よりも強い民族に這入つて中原の鹿を爭うて行くことをやるかやらぬか、どつちがよいかと云ふことになる。それであるからそれは此宗教問題が非常に關係して居ると思ふのである。

○基督教と世界的精神

それで基督教が今日まで嫌はれて居る以所は此世界的精神を與へるだらうと云ふ其處が心配の所である。世界的思想を日本人の中に與へて了つたら、日本人の團結を壞すだらう、色々困つたことが起つて來るだらうと云ふ心配が或人の中にあるけれども、予は云ふ、それは杞憂である。今日英國はどうであるか、獨逸はどうであるか、獨逸と英國は根本的に同じ宗教を有つて居る、即ち世界的宇宙的信仰を有つて居る、眞善の神を崇拜して居るのである。併ながら國民が團結を成して行く上に於てはそれが爲めに何等の弱い所がない、なか〳〵强いではないか、新なる精神と新なる基督である、我々から見ると歴史の發展から見ると、宗教の發展から見る時には是は未だ古代文明に屬して居る。今日我日

本が世界に民族が發展しやうとするには、精神の根本的宗教なる所に新しい正義新しい原理を握つて即ち亞米利加に行けば亞米利加人と、濠太利亞に行けば濠太利亞人と共通の其根抵に立つて行かなければならぬ所がなければならぬ、其處が基督の主張して居るところである。さうしてやつて行けば日本民族が行ける、それは今日對等の交際をする以上は向ふからも此方に歸化して歸化權を與へる以上は、此方も向ふへ歸化して宜さふなことである。それを得られぬことなら此方は弱い、其處は堂々とやつて行くことが出來るであらうと思ふ。それで加奈陀へ這入つて居る者は二つの歸化權を持つて居る。日本人であり加奈陀人であると云ふ。是も面白い、マア一代はさう行かうけれども、併ながら子の代はさうは行かぬ、妙なことで子が產れふば日本の政府の方へ報告するやうにと云ふことがある。子まで兩方の籍へ列つて居る、是は面白いことで早晩何事が起つて來る原因である、默つて濟んで居るやうだけれども、早晩是は起る、そんな姑息の仕事をして居つては早晩何か起る。奮發して嫁にやつてしまうかどうか、それは日本人の態度である。奮發して吳れてしまうか、どうしても吳れられぬで置くかどうかと云ふ斯うなつて居る、是は宗教的に精神上からである。それで根抵が變れば吳れられる。根抵が變らぬ間は吳れる譯に行かない、何うしても吳れる譯に行かない。そこでどつちがよいかと云ふことが實に焦眉の問題ではなからうか。日本の政治家たる人も能く考へて貰はなければならぬ、どうしても考へて貰はなければならぬ。予等は政治家ではないから今の今、日本の成行がどうなるか分らぬけれども、是は日本國民の將來の發展に關して此間に米國に打當つて居る、此打當つて居るのは予が知つてから二十年此方打當つて居る、であるから予は强い衝突が來ると思つて居る。そこで今度は

日本人を今日の儘にするならば戰つて征服して發展するかどつちかである。それが一つ、朝鮮はそれでやつつけた。滿洲もやつつけた。併ながら世界中を征服することが出來るかどうかは問題である。是は考へなければならぬ。そこで其次は嫁にやることが出來るやうにして置くかどうか、又嫁にも行くかどうか、其行く樣にするに付ては精神上から變へなければ行かれまい、即ち世界的に宗教の根據を注がなければならぬことになつて行くのである。それであるから宗教は政治家がさう苟且に見て置くべきものでは決してないのであつて、從來斯の如く宗教を度外視して居たことは、甚だ面白くないことである。それと是は唯一向自分の安心立命を得るばかりでなく、國家の一大民族の發展の上に付いて大問題であるから能く考へて貰ひ度いのである、さうして宗教の實質は前に述べた通りに世界共通の眞善の此道義的原理の所に存して居ると云ふことを認めらるれば予は誠に滿足である。

發展的日本人性格論

○世界的發展の精神氣力ある日本人

日本人は元來現在の日本諸島に發生した人民でなくして、遠き外國より渡來したものである。故に所謂土人根性に支配せられたる人民ではない。又其日本に來りしは敢て他の優勝なる民族の爲めに壓迫驅逐せられて已むを得ず逃れて來たもの、即ち戰敗者の狀態で來たものではない。たゞ、その生活の爲めに然るべき住所を求めつゝ、幾多の海陸の險を冒して終に東方の美地に列達したものである、故に我が國民は又冒險の精神に富み、發展し能ふ限りは發展すると云ふ氣力を以て居る。而して斯く日本の諸島に集り來れる人種は一民族のみで

はなかつた。馬來人種もあれば朝鮮人種もあり又所謂天降人種もあればアイヌ人種、支那人種もあり、之を細分することは難かしいが、兎に角四五の人種を代表したものが或遠隔の地方から海陸の險を冒して來たものである。思ふに其狀態は恰かも今日の北米合衆國の如きものであつたらう。型こそ小さいが餘程よく似た處がある。北米合衆國は獨り英國のアングロサクソン人種が渡來したのみならず、獨逸人種、スラヴ人種、拉典人種等歐洲各國の諸人種に加ふるに阿弗利加のニグローまでも集まつて、是等の人種は今や漸次混合しつゝある。太古の日本も亦斯の如く大陸より種々の人種が渡來し、之が混合して今日の日本人をなすに至つたのである。而して是等の諸人種が孰れも戰敗者、柔弱無氣力の民族でなかつたと云ふことは古來朝鮮支那に向つて野心を抱き、種々の冒險的事業を企てた跡に徵して歴然たるものがある。我國は或は朝鮮の一部を占有して居つた時代もあつた。又支那の沿岸を侵掠して、其人民をして東夷の名に戰慄せしめた時代もあつた。我國民本來の性質は斯く發展的、冒險的なるに拘らず、何故に長年月の間孤立して世界的發展をなし得なかつたと云ふに、之には相當の理由がある。

○從來發展せざりし理由

第一の理由は大平洋の餘りに大きくして、往時の文明程度を以てしては到底之を渡つて東の方に發展することは不可能であつたことである。ドレーボルが羅馬帝國の膨張を批評して、羅馬が南北に擴がらずして東西に伸びたのは寒暖の差ある地に伸び難くして寒暖同じき地に膨脹し易きが故であると云つて居るが、實にその通りで、我日本の諸島も若し大平洋上に東西に連亘して居つたな

らば非常に膨脹し易かつたらうが、實際は南北に續いて居るために寒暖の差激しく、同じ風俗習慣、同じ生活狀態の人民の發展は困難であつた。今日と雖も中國、九州區の人が樺太や千島に移住することは困難であるし、又北方寒地の人が南北の琉球、臺灣に生活することも困難である。故に文化未だ開けずして氣候の變化に堪え得る設備のなかつた時代に於て、我日本人が、北海道以北、琉球以南に發展し得なかつたのは當然である。氣候のよく似た處へでなければどうしても發展がし難い、日本は斯く東及南北に發展し難かりしと共に又西にも發展し難くなつた。何故なれば西方大陸には更に〳〵支那帝國が起つて、之に對抗して生存競爭することはあらゆる方面に於て力が足りなかつたからである。我國力を持てしては大陸帝國の壓迫を受けざるだけの國防を全ふすることがやつとであつた。斯く東に向ての發展は太平洋上のために隔てられ、西に向つての發展は寒暖の差甚しきがために妨げられ、北に向つての發展は大陸帝國の爲めに邪魔せられ、天性冒險發展の精神氣力を有する國民も勢ひ島國内に孤立するの已むを得ざるに至つたのである。尤も我日本諸島にして氣候惡しく、食物に乏しく、瘴癘磽确の地であれば、生活難に迫られて、强て他の方面に發展の地を求めたであらうが、事實は然らずして氣候は溫和にして地味は豐饒に、風光は極めて明媚なる美地である。我々の祖先は日本諸島より更に美にして且更に豐かなる地を見出さなかつた。これ此諸島に足を駐めて國内の開發に全力を注いだ所以である。斯く我日本人は發展の性質を具有し乍ら、地理上の關係により其發展力を妨げられて居つたのである。故に若しこの地理上の妨害を除くだけの文明の利器を得て、自由に大洋を航海し、世界の端より端までも往來し寒暑を冒して生活し得るに至らば、此時こそは即ち我々の祖先たる諸民族が

日本に來りし意味合を更に大きくして世界に發展するの時である。我々の祖先が南より北より西より非常の發展的精神、冒險的氣力を以て日本諸島に集まつて來た其精神氣力を以て更に其翼を世界に擴げるの時である。

○世界的發展の要求

凡そ如何なる國民でも世界的に發展するは、內に何か已むを得ざる特別の要求がなければならぬが幸ひ我日本民族には此の要求がある。其要求とは即ち人口の繁殖である。日本人は元來繁殖力に富んだ人種であつた。從つて一時は非常の勢を以て繁殖して、一通り諸島に行き渡つたが、德川幕府の鎖國時代には一向人口が殖えなかつた。これ敢て我民族の精神氣力の萎微せるに由るにあらず、又生理上繁殖の能力を減せるに由るにあらず、實に殺兒法を行つた爲めである。德川幕府時代に殺兒法の行はれたことは實に非常で士農工商を通じて、盛んにこの自然に背いた人の減少法を行つたものである。尙ほ人口の增殖せざりし他の一原因は飢饉である。鎖國當時は素より外國米の輸入が出來ないものであるから、凶年には餓孚路に充つといふ有樣であつた。然るに明治の初年以來殺兒の習慣を嚴禁した爲めに、人口の增殖著しく、始め三千萬と云ひしものが忽ちにして三千五百萬となり、四千萬となり、今や五千萬以上である。殺兒の習慣禁止來僅々四十餘年にして三千萬の人口は二千萬餘を增して五千萬以上となつた。この繁殖力は實にえらいものである。斯く人口の增加著しきが故に、とても國內のみで生活することは困難である、何處か海外へ出でなければならない。內に力が溢るれば世界に蔓延するの外はないのである。

○勤儉貯蓄の弊と喜ぶべき就職難

茲に注意すべきは近頃流行の勤儉貯蓄である。成る程勤儉貯蓄も惡くはない併しあまりに之に偏すると、自然萬事が消極的になり、萬事に消極的になる結果は兒女を多く持たない考を起すやうになる。斯く人工的に兒女を多く持たない考を起すやうになれば、遂には佛國の如き有樣となる。佛國が今日の如く人口少なくして生氣に乏しきは必ずしも勤儉貯蓄ばかりが其原因であるとは云へないが、勤儉貯蓄も確かに其一大原因である。人間子を生むことに消極的になるやうではとても世界的に發展する望みはない、最早絶望である。國家の自滅である。世に所謂生活難こそ世界的發展の動機である。例へばかの學校の卒業生就職難の如きも一見頗る悲しむべき現象のやうであるが、よく之を考へて見ると、却て日本のためには非常に慶すべき事である。日本人は從來勞動者として海外にも發展して居るが、未だ學力的の發展は試みて居ない。然るに卒業者就職難は適々日本人が勞働的に世界に發展するの素因をなすものである。而して學術を以て世界に發展することは勞働者を以て發展するに比して遙かに進歩したる發展の方法である。かの蘇格蘭の如きは勞働者としては殆ど何等世界に貢献する處はないが、技術を以て世界に貢献して居ることは實に非常なものである。現に東洋にも技術家としての蘇格蘭人は澤山來て居る。而して彼等は何等かの技術的事業の長上の地位を占め、東洋人の上に立つて仕事をして居る。斯くの如く技術を以て世界の舞臺に立つことは眞に慶すべきことで又世界の歡迎する處である。故に近時の學生就職難問題の如きも敢て之を悲觀するを要せないと思ふ。所詮人間は食に窮することが最も痛切の問題である。食を得るた

めには何地を問はず移住する。卒業生の就職難は結果日本の學力を世界的に發展するものとして寧ろ大に歡迎すべきものであると思ふ。世には往々あまりに學者が多くなつて困るから學者が殖えない方策を講ぜなければならぬと云ふ論者もあるが、斯の如きは最も不通の論である。學ぶを欲せば自由に學ばすが宜しいのである。今の如く、高等學校の入學志望者中僅々十分の一のみ其志望を達して餘の十分九を路頭に迷はしむるが如き教育制度は精神的に是等の青年を殺し、延て國民の世界的發展の氣力を銷沈せしむるものである。今日は我勞働者を海外に出すことが問題となつて居るが遠からずして學者を海外に出すことが問題となる時節が來ると思ふ。而してこの時節が來れば少しも顧慮する處なくドシ〳〵海外に出すか宜しい。要するに人口が增殖し、增殖せる人間が學問技術を修め、漸次學者の增加を見るは國家のために大に慶賀すべきことである。

斯く我國内には世界的に發展すべき要求があるのであるから我國民の指導者を以て任ずるものは、日本國内のみを見ずして廣く眼を世界に放たねばならぬと思ふ。即ち同じ勤儉貯蓄の精神を吹き込むに際しても單にその奬勵のみに努めずして寧ろ之に依て得たる餘裕を以て世界の先進國に企及するまでに生活程度を高からしめんことを期すべきである。乃ち從來二圓の家賃の家に住みしものは勤儉の結果三圓の家に住み得ることゝならしむる如く、之を積極的に指導するを要する。日本國民は決して貧乏に安んずる國民ではない、富を求めて進む國民である。之を壓迫して消極的思想を抱かしむるが如きは、經世家の最も戒慎すべき處である。

○敵愾心は世界的發展を害す

日本の國民性が果して世界的に發展するに適するか否かは尙ほ一の見方がある。從來の國民性には却て世界的發展の業をなすものがあるやうに思ふ。從來の日本人はあまりに敵愾心が多い。敵國と外國とを同一視して居る。斯く此方より外國を敵視すれば外國も亦日本を敵視する。玆に於てか日本の發展は世界の大恐慌となる。故に百方之を妨げ、結局我國は八方塞りの禍を招くことゝなる。この敵愾心なるものは過去の日本に於ては、大陸よりの壓迫を防ぎ、國家の獨立を維持するために必要であつたのである、我二千年來の歷史は畢竟敵愾心養成の歷史である。或は我大和魂とは敵愾心の別名ではないかと思はれる位である。或る外國人が我國民を評して日本の國民は一國民としては實にえらい、又珍らしい國民であるが、併し之を世界的國民として見る時は殆ど其價値がない餘りに孤立的であると云つたことがあるが、此點は吾人日本人たるもの深く自ら省みなければならぬと思ふ。我國民はあまりに敵愾心多きがために世界を友としての精神に乏しい、二千年來養ひ來つたこの國民性は今は却て日本人の發展の妨害物となつて居る。果して然らば之に次で起る問題は此國民性を變化し得るや否やと云ふことである。之を變化し得ればよし、若し變化し得ざれば世界は壘を高うして我國民の發展を拒むのである。斯くなれば先づ第一に他を我に同化することが難かしい。加之世界の優勝民族が皆我發展を妨害する。敵愾心が如何に我發展の妨害をなして居るかと云ふ一例を擧ぐれば、かの支那の留學生である。彼等が日本に來て學ぶものは學術である。而して學術以外に學ぶものは敵愾心である。而して彼等の學び得た敵愾心を歸國後孰れに向ける

かと云へば最も近い處、即ち我國に向ける。日本で教育を受けた支那人に排日思想を有するものゝ多いのは實にこれが爲めである。而して今假りに日本人が位地をかへて支那人となつて見たらどうであるか、排日は當然と云はざるを得ないのである。即ち日本人は他に日本的敵愾心を傳播して自ら傷けつゝある。假令、國民が外國に對して敵愾心を有するはよいとしても、平和無事の日に國内に於て相互に敵愾心を抱いて喧嘩するに至つては沙汰の限りである。敵愾心あり、外患ありてこそ、兄弟墻に鬩げども外其侮を禦いで大事の前の小事と、一致團結も出來るであるが、敵國なく外患なき時に、兄弟墻に鬩いでは結局共に傷き、共に斃るゝの外はないこの敵愾心は實に恐ろしい國民性である。かの朝鮮の亡びたる所以は、地理上大陸と海とに壓せられて居たゝめに國民自ら事大思想となり、外交上の權謀術數によつて漸く自己の安全を圖つたことが習ひ性となつて、遂に彼等相互の間に應用し、自ら傷け、自ら滅びたのである。日本の敵愾心も國力の發展を害する點に於ては之と同樣である。今や日韓の併合は成つたが、其結果、日本の敵愾心を彼等朝鮮人に吹き込み、却つて排日熱を盛にするが如きことはなからうか、私かに吾人の懸念する處である。日本人が如何に敵愾心を喜ぶかは新聞紙の三面を見ても分かる。今日の新聞紙の三面に復讐の講演の較つて居ないものは殆どない。而して此思想を以てせば朝鮮人が日本に復讐することは日本の立場より云へば之を是認せなければならぬのである。かの伊藤公を暗殺した安重根の所爲の如きもこの日本的精神より見れば之を惡とする譯には行かなくなる。日本でも近く明治維新以前までは彼れの如き人間が愛國者であつたのである。自ら朝鮮人に敵愾心を敎へ、朝鮮人の敵愾心を起して日本に反抗すれば、益々之を惡むと云ふ如き有樣では果して世界的に發

展し得るかどうか、甚だ之を疑はざるを得ない。朝鮮は實に日本の試金石である。よく之れを同化し得れば日本人は世界的に發展し得ることが明かであるが、若し之を同化し得ずして却て反抗心を增さしむるやうでは、日本の前途も甚だ疑はしくなる。北米合衆國人は、日本人はどうしても同化せざる人民であると云ふて居るが、之れは我々の餘程考へなければならぬ問題で、若し此言の如しとせば日本人は到底他民族をも同化し得ざる人民である。何となればその同化せざる精神を他民族に傳道するからである。日本人が愈々同化せず又同化されない一種妙な民族であるとすれば、恰も財界の猶太人の如く、政治界に於て世界の嫌惡物となり、假令個人的に發展し得るも國家的には到底發展し得なくなる。故に此國民性——敵愾心を一轉化し得るや否やは、日本人の世界的に發展し得るや否やを決すべき契點である。

○敵愾心は速に脱却すべし

日本人の强烈なる敵愾心は海洋と大陸とを敵としたる歴史と境遇との然らしむる處であつて、其本性にあらずとせば、この性質は境遇の變ずると共に變ずべきものである。而して今後の日本は最舊時孤立の日本にあらずして世界の日本である。交通も、通商も、學問も、經濟も、其他百般の事悉く世界的でなければ立ち行かないのである。日本が發展すれば發展する程益々世界的でなければならぬ。假へば鐵道の如きも、日本の諸島だけならば狹軌で間に合ふとしても、一歩對馬海峽以外に踏み出して、朝鮮に行くと鐵道の連絡上、廣軌でなければならぬ。即ち世界共通の方針を以て經營せざるを得なくなる。これは一例であるが萬事がさうである。是に由りて觀るも日本人が世界の人と交はるだけ

世界的となるのは自然の勢である。今後の日本の歴史は最早過去の歴史の如く孤立敵愾の歴史にあらずして世界的共通的の歴史である。且幸に日本の敵愾心は宗教に基くにあらずして政治に源因するものであるから其根柢が淺い、政治上の境遇が變ずれば容易に變ずるものである。現に德川幕府の末年には鎖港攘夷の說が盛んであつたが、明治維新以來は一變して開國進取となつた。鎖國攘夷と開國進取と方針は全然相容れないが、精神は一、即ち御國大事である。從來の日本人は御國大事の念にかられて敵愾心が多いのであるから、若し一朝敵愾心は却て御國の大事を誤るものであることを覺つたならば、容易に之を脫却すること猶明治維新以後に鎖港攘夷を棄てたが如くであらう。又日本にある宗教の內、神道は全然民族的であつて世界的でないが、佛教は民族的執着を脫却したる世界的宗教である。これ佛教のブラマ教と異なる處で、ブラマ教は民族的なるが故に、印度のみに信奉せられ、佛教は世界的なるが故に東洋諸國に廣まつた。然るに佛教日本に入つて千有餘年、境遇上の必要より國民的の方面のみを發揮した爲めに本來の世界的の性質は隱れてしまつた。此故に日本には隨分高僧智識が出たに拘らず日蓮の高弟日持を除き、未だ曾て大陸傳道の壯擧を企てたものはない。併しこれが佛教本來の面目ではないのであるから國民の境遇が變つて世界的となれば自然に本來の面目たる世界的の方面が發揮せらるゝことゝ思ふ。斯くの如く從來の宗教と雖も日本人の世界的發展を妨ぐる如き性質のものではない。加ふるに十萬人の基督教信者がある。基督教は最も世界的の宗教である十萬の數敢て多くはないが、日本人が世界的に發展し得ない民族でないことを明らかに證據立てゝ居るものである。この十萬の基督信者は、學者たると無學者たるとを問はず、悉く世界的の思想を抱き、ために或一部の人

からは忠君愛國の思想を有せざるかの如く疑はれて居る程であるが、忠君愛國の思想を失ふどころか、却つてその念を深うして居るのである。今日に於て既に十萬の日本人が基督教信者となつて居ると云ふことは即ち他日數十萬數百萬の日本人が世界的、博愛的になることを豫言して居るものである。故に今後佛教家が覺醒して其本來の世界的精神を發揮して、基督教之を鼓吹する時は、邦人茲に四海同胞の思想を有するに至り、復讐を喜ぶ心の如きは單に昔物語として存するに過ぎざるまでになるであらう。斯くて商業、教育、政治共に能ふ限り世界的となるに於ては、日本人の發展妨害物は茲に漸く除かれ、眞に世界的の大國民として立つことが出來るであらう。

○發展を防害する諸點

上述の如く我國民は世界的に發展する資格を具有して居る併し一方に於ては又其長處の裏に短所のあるとを認めねばならぬ。包擁は動もすると模倣に流れ、冒險は多く蹉跌を來す。併しこれ等の短所——長所の裏の短所——は注意すれば避け得らるゝのであるが、此に最も吾人の考慮すべきは、日本人は兎角あまりに性急に他を日本化せんとする傾向を有することである。人種の異なる人民を支配するにあつては、或る點までは其人民固有の風俗習慣制度等の、存在を寛容せなければ、却て種々の面倒なる事件を惹起し、統治の圓滿を缺くに至るものである。この點は餘程英國人は學ぶべき處があると思ふ。英國人は元來非常に保守的で、決して他に同化せないが、人種の異なれる領土を支配するに當つては、性急に之を英國化せしめると云ふことを勉めない。從つて統治の成蹟を擧げ易い。思ふにこれが英國今日の盛大を致した一大源因であらう。教育等

の力により漸次同化せしむる方針を以て進むは宜しいが、餘りに性急なる同化政策は多勞少効の拙策である。我國が臺灣、朝鮮等を統治するに當つても、常に此心懸を以て臨まなければ到底十分の効果は收め得まいと思ふ。次に注意すべきことは日本人は他に同化せぬことである。中には往々極端なる西洋心酔者もあるが是等は殆ど例外であつて、多くは他國にあつても日本の風俗習慣を固執する傾きがある。米國が日本の移民を排斥する如きも、經濟上の理由を始め種々の源因があるであらうが、其根本的の理由は日本人が米國風に同化せざる點にあると思ふ。而して日本人の外國にあるものが其居住國の風に同化せざるは單に下級の勞働者のみに止まらずして中流以上の在留者たる留學生、會社銀行員等多くは亦同樣である。是等の人々も亦多くは外國人との交際には疎遠で、在住の日本人のみと親密に交際して居る。斯の如きは一方より云へば寔によき事であるが、鄕に入つては鄕に從への主旨には適つて居ない。身外國にあるものは勉めて外人と交際し、よく其國情、言語に精通し、苟くも日本人たるの精神を失はざる限り少なくとも外形に於ては之に同化せなければならぬ。若し邦人にして此襟度を缺ぐこと從前の如くならんには、將來と雖も世界的に大發展することは、假令絕對に不可能ではないとしても、頗る困難事であると思ふ。

尙ほ一つ注意すべき點は、邦人の獨立獨歩自主の精神に乏しきこと、即ち個人的の發達が十分でないことである。從來邦人の經營せる少しく大規模の事業が殆ど悉く政府の補助を仰がざるはなき事實は如何に其獨立自主の精神に乏しきかを最もよく證して居る。敢て必ずしも政府の補助のみとは言はない、邦人は餘りに多く他の補助に依賴する國民である。之は我國が世界的に發展するに當つて一大障礙となるべきものであるから勉めて此の弊を脫却し、智識道德を始

め凡ての點に於て個人的に優秀なる國民となることを期せなければならぬ。尙ほ之に附帶して言ふべきは、僅少の例外を除くの外は兎角、滿身の精力を傾注して事業に活動するの精神に乏しきことである。これ我國は從來必ずしも大なる勞力を費やさずして、容易に生活する事を得た樂土であつたから、自然勤勉の風を缺くに至つたものと思はれる。或外人は邦人を評して、日本人は恰かも南歐人の如く暢氣である。大に活動し、大に富まんとするの意思なく、寧ろ相當の活動相當の富に滿足して、安樂に餘年を送らんとするの傾きがあると言つたが、これは大に味ふべく又考慮すべき忠言であると思ふ。同じ外人又曰く、日本人は斯く佛國人、伊太利人に似た風があつて、英國人若くは獨逸人に似た風は少ないが、併しそれは却てよいのである。何も大に活動し大に富む事が人生の目的ではないと。これこの言の中には實に人生の大問題を包括して居るから容易に其可否を解決することは出來ないが兎も角も邦人に反省を促すに足る意味深長の言であると思ふ。

○同化は世界的發展の捷徑路

又我國民は到る處機會を得る毎に其國に歸化するは即ち世界的大國民となる一大捷徑路である。外國に歸化する者を指して愛國心なしとし、日本の衰微の源因なりとする如きは頗る偏狹なる考である。常識を以て考へても直ぐ分ることであるが外國に歸化した日本人が自己の生國に向つて弓を引く如きことはあるべき筈がない、歸化人の多きは却つて彼此の國交を調和する一大勢力となるのである。其適例は北米合衆國に於ける獨逸人である。北米合衆國には獨逸人の歸化した者が一千萬人ある。一千萬の人は合衆國全人口の約八分一である。

實に盛んなものと云はざるを得ない。而してその歸化人の爲めに、獨米間の國交は極めて親密で、殆ど相離るべからざる者がある。又外國に歸化する自國人の殖えることは即ち其國に對する貿易の增加、即ち國力の世界的發展を意味する歸化人多ければ我彼に同化せられたると同時に自から我彼れを同化するものである。而して同化は世界的大國民たるの最大要素である。之を要するに我國民は冒險的發展的の天性を有して、從來世界的に發展せなかつたのは地理上、政治上の關係によるものである。故に地理上政治上の障礙除かれたる今日、佛教の覺醒は基督教の活動と相待つて、益々國民の世界的精神を鼓吹し、我と列國と彼我互に相同化して世界的發展を遂げ得る望は十分にある。吾人は宜しく此精神覺悟を以て今後に處すべきである。日本人はその本來の面目を發揮さへすれば自然と發展して世界的大國民となるは疑ひない、要はその自然的發展を防礙せざることにあるのみ。

何を自覺せしや

○大なる決心の門出

放蕩息子の譬については、我が教壇より是迄二度語つた事があると記憶してゐる。一度は先年高山樗牛子が心中の大なる煩悶を述べて、「われパンを求むるに石を與へられ、魚を求めんとするに蛇を與へらる」と號泣し、日本教育界が人人の深い要求に對し、何をも與へざる所の缺陷を擧げて訴へた時、我はその聲を聞いて、放蕩息子の譬喩の一端をこの教壇より語つたのである。今日世論の囂々たる聲を聞き、復この譬喩の一部に思ひ當らざるを得ない、放蕩息子の比喩には三個人の人物が現はれてゐる、即ち父とその二人の子である。元來キリ

ストがこの比喩を案じ給ひし時は、その本旨とせる處恩愛の父であつた。然るに世にはこの父を主人公とするより寧ろ放蕩兒を主人公と考ふるのであるが、これ亦人情止むを得ぬ事であらうと思ふ。今我が言はんと欲するも、復放蕩兒その人であつて、彼がいかにして放蕩兒となつたか、及びいかにして悔改むる神精を起したかを、こゝに述べて見たいと思ふ。彼は良家の兒であつた、而も豐な兩親を持つてゐて、生活上何一つの不自由もなく、精神上曾て煩つた事はないと思はれる。彼の兩親はやさしい善い立派な父母であつた樣である。彼の兄もまた弟思ひの兄であつたらしく思はれる。誠に世にも幸な境遇の下に彼は育て上げられたのである。然も彼は一個の量見を有してゐた平々凡々な無能な青年ではなくて、人に劣らぬ技量も手腕も思慮もあつたのである。而も自分でよく之を自覺し、強い自信力をもつてゐた。さればいつ迄も親の家に居り、兄の下に働いてゐるのを、あまり愉快に思はなかつたのである。あたゝかき家で穩に暮してゐるのは有がたい事なれど、男と生れた以上どうしても自己の腕を以て前途を切り開いて行かねば、面白くないと考へた。氣樂に居るよりもむしろ困難をえらんだ、誠に殊勝な精神であつた。獨立にあこがれ自由を望んで彼は遂にその心を父に打開けた。そしてどうせ財産を分けて頂くなら、どうか只今頂きたい。それを資本として一つ働いて見たいと云ふ旨を述べた。父もその健げた決心を認めて其莫大な財産の幾分かを弟の所有にしてやつた。愈々我時至れりとて、この青年は直に不動産を動産に替へて、希望に滿ちた立身の門出に登つたのである。彼は遠國へ旅立したとある。いかに決心が大きかつたか又自ら恃む處もいかに強かつたかゞ察せらるゝのである。

○オーソリティを失つた日本

大きな理想を以て、父の家を出た彼は直に何を見たか、不幸にして彼は未だ經驗に乏しかつた、その經驗の割に希望があまりに大きすぎた。十分の技倆と思慮とはあつたが、經驗の乏しいのが何よりの缺點で、而も亦止むを得ぬ處である。恐らくは彼れ生れて未だ一度も人に欺かれた事もなかつたであらう。しかし彼の途には欺く人が充ちてゐた。その少なからぬ財産は直に彼等の乘ずる處となつた、かれはもろくも打負けたのである。腹黑い世の中の人の誘惑の罠には造作もなくかゝつて、彼は散々に破れ、莫大の所有は霞の如く消えてしまつた。あはれむべし、雄々しい壯圖も一擧にして根底から打ち摧かれた。希望の春は一日にして冬の簫條に化したのである。彼はあゝ我事止むと云つて、直に父の許に歸つたであらうか。否、彼の剛膽、彼の自信力は彼の志を尙碎いてしまはなかつたのである、彼は再び蹴起の道を工夫したけれども、貧すれば鈍するのである。恰も年饑饉に際し、世間の不景氣には彼の面目一新の道も何ともすべからずであつた。彼は止むを得ずして、異境の一人に身を托するやうになつた。そして猶太人の最も賤んでゐる職業即ち豚飼として住み込んだのであつた。けれども主人は十分彼を歡待しなかつた。彼を野に遣せりとある。豚を相手の生活である。邊りに友も居らぬ淋しい日を送つた。況んや饑饉の事とて腹に充ちる程の食物も得られぬ。彼は暫らく豆粕を食つてゐたが、それでは迚もつゞけて行く事は出來ぬ。しかも誰あつて省みてくれる者も無い。この青年の道行は古今東西幾度も〳〵繰返さるゝ處である。日本の社會では一人々々がこの道行を辿るものが多からう。今時の日本の青年男女はオーソリティを棄て

去つた。昔時は四恩の權威があつた、即ち親の恩、師の恩、君の恩、國の恩とかぞへてゐた。恩のある處にはオーソリティがある。今の青年には親のオーソリティ師のオーソリティなし、君はあまり遙かにして人民はそのオーソリティを感じがたく、國も亦同樣であつて適切なるオーソリティとなり兼ねる。斯て凡てのオーソリティより脱して誤れる個人主義となり、誤れる個人主義より更に利己主義となつて行のである。何等のオーソリティに制せられず、獨立自尊と云ふ心立は誠に尊ぶべき處なり、されども弱點はこゝにあり。日本の青年は果してその自己の內部の强きオーソリティに觸れつゝありや、成はその觸るゝ所の影法師ではあるまいか。放蕩兒の比喩は誠によい見せしめである。彼はオーソリティより脱せんとして、散々破れたのである。近時日本青年の狀態はかくの如きではなからうか。否、日本帝國そのものゝ現狀が誠にかくの如きではあるまいか。日本は王政維新よりこのかた大なるオーソリティを失つた。昔は朧ろげながらも之れがあつた。例へば五箇條の御誓文に就いて見るに、これは天地神明に向つて誓ひ給ふたものである。神明は天皇以上である。或る詔に上鬼神を懼れ、下萬民に恥づ、とあつたと記憶してゐる。然るに明治の時代は神のオーソリティを日本より無くなしたのである。唯獨り明治天皇は之を認めて尊崇し給ふた。國務大臣にして誰か天つ神を尊崇し、教育家にして誰れか敬神の大義を高調したのであらう。一切このオーソリティ無しに國を建てんと考へたのである。伊藤公がビスマルク公に會つて憲法政治を日本に施く志望を語つた時、宗教はどうする積りかと尋ねられ、之をぬきにする積りであると答へた所がビスマルク公は之を聞いて驚き無宗教の憲法政治は我れまだ之を聞かぬといふたとの話がある。明治の政治家は世界史上破天荒の奇蹟を行はんとしたので

ある。當時確かに當局は確信があつたのであらう。神即ち至大のオーソリティなくも立派な國家を建てる事が出來るといふ十分の自信があつたからであらうと察せらる。その結果は果して如何。

日清戰爭に大勝利を得た、日露戰爭にも世界に勇名を揚げた。誠に勇氣は偉いものであつた。しかも一面より觀れば、之は全く欺むかれたのである、否自ら欺いたのである、一旦萬國に轟かした勇武の美名は、僅か十年の命を保ち、今日泥土に委せんとしつゝあるではないか。今日の都下各新聞の記事を飜譯して、歐米に發表するならば如何。今や日本人は世界に何を誇るべきか、誠に國政上一大改革を爲すべきの時である。然も命なるかな、これ大饑饉に遭遇したのである。物質界の饑饉にあらず人爲の饑饉である、法律學者なきにあらず、政治家なきあらず、眞に人格あり、オーソリティ士君子の乏しきを云ふ。實に士君子が大饑饉である。內閣の更迭には後繼者なきを如何せんといふではないが、改革の道も進退窮せるではなからうか。かつては國粹を謳歌し、西洋の文物を罵つた雜誌も、今や日本の醜體を暴露して憚らないのではなからうか。

彼の放蕩兒は豚と同じ境遇に落ちて、初めて自覺したのである。何を自覺したるのか。彼は故山を想ひ起した。故山には父あり、母あり兄あり、又多くの僕婢あり、その僕婢の一人だに、われの如く食に惱み、風雨に苦しむ事なく、無事に寢食しつゝあるのであるではないか。彼は自分のあはれむべき汚れた姿を見て今更ながら自己の不覺を自覺したのである。悲むべきことながら此一面を我が國民は自覺しつゝある。如何なる處まで墜ちてゐるか。何の誇りもなく何の價値も認められぬ所である。青年が父母を思ひ自ら顧みたる處は云ふに云はれぬ悲哀である。理想と實現の相違の甚しき苦みがある。心ある人は理想を

以て決して夢とはしない。しかし空想と理想とを取り違ふことがある。理想は我々を誤らせるものでない、過らせるものは空想である。明治時代の多くの理想が帝國にあつたが、空想が交つて居つた。憲法を布かん法律を立てん、教育を普及せしめん、富國强兵の實を擧げんなぞ、その澤山の理想があつた。

○立ちて父に歸らん

乍去今日となつて觀れば悉く失敗であつた、空想ではなかつたと疑はるゝこゝには大なる要素が無視せられて居つたかと思はるゝ。近時は之に心付く人が增えたやうに想はるるのである。是れは國民の自覺である、國民は神より離れ去つた憐むべき姿を自覺するは、乃ちその自から改善する始めである。放蕩兒は絕望する必要はない、必ずその前途に活路が開からるゝ。この放蕩兒は決して井に身を投げ樣としたり、首を縊らうとしなかつた、心をひるがへして父の家に歸らうと考へた。曰く「立ちて父に歸らん」と、最も善い又賢い自覺である。彼は故山を想ふて、やゝ一縷の希望を起して、勇氣を生じたるのである。彼は襤褸のまゝ立ち歸らんとした。錦を被て歸るは如何にも歸りやすいのであらう然るに彼は襤褸のまゝ歸らんと決心した。其心中の感想さながら溷濁の浪の狂へる如きであつたらう、歸つて彼は何と云つたか、「父より我天と汝の前に罪を犯したれば、爾の子と稱ふるに足らざる者也、爾の傭人の一人の如く我をなし給へ」と云つた。大に悔いてかく迄身を下げて詫びたのである。彼は父の前に悔いたならば、必ず許さるゝに相違なしと思つて歸つたのである。人窮すれば、父母を呼ぶと云ふは、昔から不易の言である。

○自覺の叫び

今日の社會は怖ろしき失望の聲を發してゐるが、之は確に自覺の叫びである。日本の首相や大臣が大金持になるといふ事は封建時代からの習であつて、誰も怪まなかつたのである。その習慣は明治大正に持ち越したのである。されば今の首相に對してその罪を問ひ得る元老は誰ぞやと云はゞ、恐らくは一人もないか分らぬ。とにかく原因は不明ながら、大臣に登れば、忽ちにして大に富むは疑を入れるべきことである。それを國民は今迄默つて見過しにしてゐた。今日一擧して之を攻擊し始めたのは自覺の兆候といはねばならぬ。世界の一方に善き模範がある以上日本人として之を看過する譯には行くまい。英國近世の首相の如きは人格の士である。アスクイスと云ひ、バンナマと云ひ、グランド

ストンと云ひ、誠に品行端正にして廉恥心あり、家庭の人としても社會の一人としても非難はない人ではなからうか。

○尊き自覺

これに比ぶれば殘念ながら我日本の政治家は何物であるか、不正な大金を作りそれを以て不品行を極め家庭を亂しつゝあるではないか。何たる亡狀。國民の之に心づきたるは遲しと雖も、大に喜ぶべきである、誠に賀すべきである。國民の理想の一進歩である。而も政治家法律家と云ふ人の山の如くあるに拘らず、政界に人なしと迄極言するに至つたのは、確に理想の人物の標準が一段卑かつた事を示してゐる、少くも品行方正にして廉潔、正義公道を愛するの士でなければ、國士と云はぬ樣になつたと云ふことは喜ばざるを得ぬ。これからは

正しく實行である。立つてその理想を實現する事である。第一神に悔ゆるを要す。天地の神のオーソリティに服するを要す。國民としても一個人としても少なる自我は善なる神と一致せしむるやう改心する事が最大急務である。

これ誠に尊き自覺である。この機會を失ふてはならぬ。今や道義の精神に返りつゝあるの時この機を失はんか、或は千歳に再び會し難いであらう。即ち國家の自滅である。幸にして奮起せる士少なからずと雖も、十分徹底し能はざるは、尙その中に不純なる性格あるが爲である。この際クリスチアンが奮起して神に祈り、神の導を得、誓つて日本帝國を根底より改革せずば止ざるの覺悟を要する。善を爲すに臆する勿れ。我が愛する國家は今や荒涼たる原野に豚と共に徘徊してゐるのである。今や幸にしてその自覺を得つゝあれば、國民はその根本的信仰に立歸り、天地神明に歸順し、絶對的にそのオーソリティを遵奉せねばならぬ。歸れ我が放蕩兒よ、歸つて天の父の生命に活くるを要す。之れを外にして活くる道はないのである。

復活の信仰

○富める者と貧しき者との比喩

路加傳の富める者と貧しき者との比喩は二の異なる意味を持つてゐる。一は單に富める者と貧しき者との幸不幸の差違を云つたもの、又一つは復活と信仰との關係を云つたものである。かく二樣の意味がこゝに含まれてゐるわけはキリスト自から云ひ給ふた事と、それから初代のキリスト敎徒が實驗した事とがあるからである。富める者と貧しき者との關係はキリスト自から云ひ給ふた所であつて、文面以外に何等かはつた意義があるのではない。キリストの周圍に

は多くの貧者があつまつてゐた、これらは常に富める者から壓倒されて、或は怖れ或は恨んでゐたものである。

キリストはよくも是等の人々に對して福音を說き給ふたのである。この比喩も野外說敎の一部であつて、一面は貧者を慰め一面は富者を警しめるが爲であつたと察せらる。之は當時の人々のよく了解した處であつて、別にも人の死後の狀態を示されたものではない。その時代の考へを提げ來つて貧者と富者との對照を面白く說き給ふたもので、全く貧者に厚き同情を示し給ふたのである。これを聞いてゐた貧者は喝采して喜んだのであらう。同時に富者は心中悔悟した處があつたらうと察せらる、この比喩を基礎としてキリストの未來觀を論じやうと思ふは大なる誤である。

こゝに考へて見たいと思ふ事は、以上の事ではない、むしろ第二の復活と信仰との關係である。この語は恰も初代のクリスチアンが實驗したことを言ひ表はすのであつて、比喩に富者とあるのはユダヤ人に當り、貧者とあるは異邦人を指すこととなる。富者が我々に五人の兄弟ありと云つてゐるのは、とりも直さず創世記に出てゐる處のヤコブの子ユダの五人の兄弟に相當する。これは宗敎上誠に富める者である。彼等はモーゼを有し、又多くの豫言者を有せる民族である。又神の選民と唱へらるゝ民族である、宗敎上何一つ缺ぐる處なく滿足してゐた民族である。この比喩に紫袍を着るとあるのはこれは王の姿である、細衣といふは祭司の姿である。宗敎に於てユダヤ民族は誠に王であり又祭司であつた。

また茲にラザロといふ貧しき者は、當時の異邦人の事である。彼等は信仰上誠に困窮の境に落ちて居た、歷史を見ればよくわかる如く、希臘にありては、

昔の神々の時代は過ぎ去り、昔の信仰は過ぎ去り、昔の信仰は學問の爲に、根抵から覆へされてしまつて、而もこれに代る何物もまた與へられてゐない狀態である。羅馬人と雖もまた似寄つた狀態であつた。彼等は誠に何も信仰の據り所をもつて居なかつたのである。ユダヤ人は異邦人を人とも思はぬ態度を構へ羅馬となく、希臘人となく等しく之を厭ひ嫌つてゐたのである。しかれども異邦人はあまり精神上に空乏を感じた結果、心ならずもユダヤ人の門々を叩かざるを得なかつた。當時ユダヤ人の會堂は所々にあつたが、異邦人はこゝを訪ね來り、しかも異邦人なるを以て堂に入る事は許されなかつた。只ユダヤ人の信仰の屑を貰つて滿足してゐたわけである。

○ユダヤ人と信仰

此の如き事情の宗教界にキリストは現はれ給ふたのであるが、その時誰が彼を歡迎したかと云ふと、傲慢なユダヤ人にはあらずして、むしろ恭謙な異邦人であつた。ユダヤ人は耳をも傾けざるに、異邦人はひれ伏して之に聽き、悔改めて遂に天使の歡迎を受けてアブラハムの懷に入る事が出來た。キリストが百人の長を愛で、我未だかゝる信仰を見た事はないと仰せられた事もあつたが、かくの如く異邦人は先驅して天國の救ひに入つたのである。精神上至つて悲慘であつたものが、一變して大に幸福となり、今やアブラハムと信仰を同じうし又光榮を同ふする身分になつた。ユダヤ人は如何になつたであらうか。彼等こそは神の招きに預るべきであつたに拘はらず、事實は正反對にして地獄に落ちたのである。彼等は地獄に落ちて大に神を怨み憤つた。しかしとう〳〵我を打つてラザロをして我を助けよといふに至らしめた。所が最早如何とも爲すべ

からざる境遇に陷つて居るのである。實際ユダヤ民族は紀元七十年に亡國の悲運を見て、悉く東西南北に散り失せて行かねばならなかつた。この異邦民族とユダヤ民族との信仰上の榮枯盛衰の有樣は、この富者と貧者との比喩に歷然としあらはれて居る。

こゝに地獄の中から富者は何と云つて助けを乞ふてゐるか、この要求が面白い。初めの中は火の苦しみを減ぜんが爲めに、一杯の水を飲ませて下さいと云つたが、それは聞かれなかつた。それで終にラザロを甦らせて自分の兄弟の家に送り彼等を悔改める樣にさせて貰ひたいと、大なる奇蹟を求めたのである。ユダヤ人は奇蹟を求むる民族であつた。パウロは「ユダヤ人は休徵を乞ひ」と云つて長大息した。キリストも「奸惡なる世は休徵を求む」と云つて居られるキリストの荒野に於ける誘惑の中に二つの奇蹟的要求がある、一は石をパンにすること、一は神殿の頂きから崖に跳び下る事であつた。これは取りも直さずユダヤ人の要求である。これを見て信仰を起さんとするのである。奇蹟を求むる心は、宗教に結びつくものであるが、一面甚だ嫌ふべく憐むべきものである。本當の信仰のない處には必ず奇蹟を求むる事がある。神々なみする人々に限り一種の異象を欲求する。神佛なしといふ人々に限り、運氣を見て貰ふとか陶宮術に入るとか、甚だ不安を感ずるのである。ユダヤ民族の一面にはサドカイ派の人々が居た、これは多く祭司であるが、丸で信仰がない。神殿に仕へながら靈魂の存在を信ぜず、天使の實在を信ぜず、徒らに不思議な事を欲求してゐた是等の人々は何か不思議な事を見れば、それを神業と認める。此怪異と信仰とを結びつける事は人々の大なる弱點である、キリストは大に之を排斥し給ふた。さらば彼等も一大不思議を見せられた、信仰を起すかと云ふと、斷じてさうで

ない。地獄の中から富者がアブラハムに向つて云ふに、「あなたの懷にあるラザロを甦らして現實の世界に返らして下さい、自分に五人の兄弟があるが、ラザロの甦りを見たら、信仰を起しますから」と。アブラハムは之に答へて、「彼等はモーゼや多くの豫言者を持つてゐる、之れより談を聽けばよいではないか」とモーゼと豫言者では事足らない。富者はいふ「否らば、死んだものが甦つたならば彼等は悔改むるであらう」と。然るにアブラハムはいふ、「モーゼと豫言者の云ふ事を聽かないならば、縱ひ死より復活する者ありとも、悔改めない」。とアブラハムは富者の要求を容れなかつた。

約翰傳によれば、ラザロは復活して居る。それでユダヤ人は信仰を起したかと云ふと、決してさうではない、反つてパリサイの人も、サドカイの人もラザロの復活を目擊して、キリストを殺さうと議決したのである。

ユダヤ人は單にラザロの甦りを見たばかりではない、更に大なる更に驚くべきキリストの復活を見せられた。初代の信徒は力を盡して之を說いて廻つたが、不信のユダヤ人は之に感ずる處なく、依然として、キリストを信じなかつたのである。これより大なる休徵はないのに、それに少しも信仰を增すことはなかつた。初代信徒の歎息これより痛刻なるものはなかつたらう。彼等がユダヤ民族に於ける傳道は全然失敗であつた。

○奇蹟と信仰

奇蹟は宗教と深い關係のあるもので、奇蹟成立たぬなら信仰がなくなると想像する人がある。之れは信仰の見地より見た言である。信仰なき人より見れば奇蹟は邪魔になる、奇蹟は一旦要求するやうであるが、一旦見せられたなら直

に信ずるかといふと、却つて疑ふのである。奇蹟ありて信仰生ずるにあらず、信仰ありて奇蹟はあり得べきものとなる。奇蹟は主觀的のものである。客觀的に人に及ぼすものでない。

キリストの復活は傳道の一大事實であるが、誰が之を見たかといふと、世の人は見て居らぬ、唯信仰ある人々のみ之を見たのである。どうして信仰ある人人にのみ見えたかと云ふとそこに根本義がある。キリストの復活と云へば、墓よりキリストが出で來り給ふたとか否とか云ふのであるが、復活はそんな問題ではない。復活は正義は必ず勝つといふ活きたる意義を有する。當時の人々より見れば、キリストの十字架は非道がキリストにあるを斷言するものである。何となればそれはユダヤの高等法院の嚴かな宣告によつて成された事である。のみならずキリストは會堂からも逐はれてゐる身分である。既に敵手に落ちたる人は神より見捨てられた證據である。故に非道は基督にありとするが尋常の批評でなければならぬ。かゝる例は他にもあつた。紀元前三百五十年希臘のソクラテスが、この同じ非運に陷つたのである。彼は裁判所にて希臘の青年を腐敗せしめた、希臘の神をなみするといふ罪名を受けて、毒杯を呑まされたのである。弟子共の外當時の人々はこれを當然の事と考へた。

○正義の勝利

キリストの方に正義があつたと認め得た者は、當時唯この弟子のみであつたらう。彼等すらも一時は茫然として、判斷に迷ふたのである、けれども一旦良心に實驗したものは確なものである。彼等は誠心からキリストの人格に觸れたから、法廷の判決を非とする外はなかつた。キリストの復活は取りも直さず

高等法院の判決を破棄する神の仕業である。人は彼を死罪に處したが、神は之を否定し破棄し給ふたとの意味となる。こゝに復活の深き意味がある。これを信ずる事が出來ぬ心は、公義正道の分らぬ心である。初代のクリスチアンにとつてはこの正義の人キリスト神の愛子キリストが殺され給ふたことはどうも合點が行かぬ事であつた。どうしてもこの方が正當であつた、法廷の方が間違つてゐるとしか思はれぬ。さらば神は此正義の方に組し給ふべきである。キリストは永久に死んで居給ふ筈はない、屹度復活すべきであると考へたのである。正義の眼にはキリストの復活は當然としか見えない。ペテロが第一に復活の基督を目擊したと云ふことは左もあるべきことである。彼れが一たび之を證言するや、正義がキリストの方にありと信ずるものが喜んで之を受くるは至當のことである。約翰傳によれば「見ずして信ずる者は福也」とある。見ずして信ずる者にして、始めて深い信仰を語ることが出來る。

本當の信仰は深い幽靈を信ずるが如き事ではない、正義公道の信念である、正義は必ず勝つといふ精神である。人は悉く我を棄つるも、神は決して棄て給はずといふのは、義の信仰である。之は義人本來の面目である。梅田雲濱の如き「唯有皇天后土知」といふ。こゝに彼が本來の耀きを見る。又宋の謝枋得の如き「皇天上帝分明」と歌つてゐる。亦之れは皆赤誠の發漏である。

○何故に奇績を信ずるか

この絶大なる精神を以て考ふれば、ナザレのイエスの復活は信ずべきものにして、決して怪むべき事ではない。復活の希望は單に來世を慕ふ觀念ではない。之は義氣の要求である、力ある要求である、人格の高貴なる要求である、神

に對する愛の欲求である。パウロが復活を完うせんと欲して奮闘するは、乃ち靈能の要求にあらずして何であらう。ソクラテイースは死に臨んで堂々靈魂不滅を論斷して毒杯を呑んだ。かくの如き人がキリストの復活を聞かば、案を打つて同感を表したに相違ない。しかれども地獄に呻吟しつゝ、神を怨み人をとがむる汚なき罪人はよしや五人復活することあるも、十人復活することあるも、何の役に立たない。キリスト曰く「好惡なる世は休徴を求む、されど與へられず」と。眞にさうである。

我々は奇蹟を信ずる。何故に信ずるかといふに、人の精神には實に偉大なる力があるから、又未だ見えぬ世界があつて、それが時あつてか勃發し來ることあるを信ずるからである。されど世人の求むる奇蹟は夢幻の如き者である、それと我々の信仰に基く奇蹟とを結ぶ事は到底不可能の事である。吾等の良心は身を殺して仁を爲す力を有する。この絶大なる力の作用を奇蹟といふならば、奇蹟といふことが出來やう。世間が肉情の滿足をのみ事とするときに正義の聲を聞いて假令九腸寸斷の苦を忍んでも、肉情を棄て去る力は斷じて外より來るものではない。

我々は正義の人と共鳴する同胞と外人との別はない、古人と今人との別はない、而のみならず我々は神とも共鳴する、かくならざれば我々の衷情は滿足しないのである。この共鳴は吾々をして神と共に生かしむる復活の力となる。復活の信仰は外觀の事實に由るものにあらず、內觀の最も健全なる道義力に由來するのである。

——向上清話——

新興力の所在

○貧しき者は幸なる哉

基督教勃興の歴史の最も古き處を尋ねると、これは荒野から又は山の中から起つて來た事が明である。昔の傳説によると、イスラエル河のほとりに生活して居た頃の狀態は、肉體上誠に豐かなものであつた。土地は豐穰である、氣候は溫和である。加ふるに畑や河や海には食物が飽くばかりあつた。誠に勞少なく樂多い平和な生活であつた。しかるに其精神生活を尋ねて見ると、驚く勿れ奴隷の境遇である。己の國でもなく、己れの家でもなく天涯のあはれむべき寄遇者であつた。のみならず、その皇帝からはありとあらゆる虐待を受けて居た。しかるに彼等が之を去つて一度アラビヤの野に移つて見ると、精神生活は頓に自由となつた。アラビヤの空の靑く朗らかなるが如く、彼等の心も誠に自由に晴やかであつた。しかし乍ら肉體を養ふべきパンは乏しく、善き水も決して得易くはなかつた。住居すらも賑かな便利な町の住居とは異なり、靑樹も茂げらぬシイ山に天幕を張つて、エホバの神に事へて居たといひ傳ふ。今の生活と前の生活と、その對照は實に極端と極端とである。肉體上より云へば、前は衣食住凡て事足る有樣であつたが、今日は山人の誠に不便な生活の營み方となつた。併し精神上より云へば昨日の奴隷が今日からは自由の民となつた譯である

さて彼等は四十年間アラビヤに山居の後、パレスチナへ侵入して行つたが、やはり其處でも彼等は野山の間に住んで居たのである。時のパレスチナの土人はカナン人と云ふのであるが、これは平地の人と云ふ意味である。即ち平地で農業商業を營んで居た人民である。これに反して一方は遊牧の民である、野山住

ひ不毛の地の人である。この山の人と平地の人との戰がつまりイスラエルの歴史といふ次第である。彼等は唯だ政治上の戰爭をしたのみならず、精神上の戰もして居た。イスラエルの有名な豫言者エリヤは山の人に屬して居た。彼はどんな姿を爲し、如何なる食物を以て食として居たかと云ふと、恰も當時ナザライトと云つて葡萄で作つたものは、一切之を口に入れぬと云ふ嚴格な非葡萄主義を守つて居た一種の團體に屬する人のやうである。彼等は遊牧の民であつた、昔の素朴な習ひを維持し恭謙な風を守つて行かうと云ふ國粹保存者であつた。時の王侯貴族はツロ、シドンなどの殷盛な都から王妃などを迎へ、且同時に花やかな文明の風習を移し入れつゝあつたので、國粹保存黨はこれに大反對を唱へたのである。王侯貴族がバールの神の爲に宮殿を建立して盛な禮拜式を行ふて居るのに對し、彼等は祖先傳來のエホバの神を奉じ、平地のバール神に反對の鋒を向けて行つたのである。これから後の時代も亦山住居の農夫であつたが地勢に感憤して起ち、北方の花やかな榮華を極めた都へ行つて、熱烈な演說をして、正義公道を絶叫したのである。正義公道は質素生活の間に育ち易いものである。華美な都風は貧富の差が著しくして、正義公道はまゝ富者に蹂躙され易い。之に反して山住居は割合に平等で、貧富の差も少なければ、貴賤の隔りと云ふものもあまり見られぬのである。正義公道は多くこの間に發育するものである。ユダヤの豫言者は代々この質素生活の間から起つたのであるが、遂にキリスト時代になつて、バプテスマのヨハネは極端な質素主義を守つて出て來た。キリストが敎を說かれる時にも一面極めて貧民の友である事を主張し給ふた。貧しき者は幸なる哉と云はれて居る。彼れ一個人に見ても質樸な一人の勞働者であつた。由來基督敎の傳播はこの道行を辿つて居る姿がある。

○天然の不便に反抗して起りし文明

近世の歐洲の宗教改革について見ても、その改革の中心人物ルーテルやツウイングリなどは質樸な獨逸や瑞西の山林の中から出て來て、伊太利あたりの華美な贅澤な風俗に反對して起つたのである。この質素の聲は基督教のある限り、止む時があるまいと考へらるゝ。今日二十世紀の文明は寧ろ北から來て居ると思ふ。古來南方は華美に北方は素樸に生活して居る。歐羅巴大陸文明の一大源泉としては、プロシアを擧げねばならぬ。人も知る如くプロシヤと云へば土地は惡く、氣候は惡く、從つて產物の乏しい、云はゞ不毛の國柄であつた。然もこゝから强い力が勃發して、全獨逸を統一し、歐大陸も動かしつゝある。獨逸は往年レッシングやゴエテやヘーゲル等の大文豪大哲學者が輩出した時代と今日とは大に趣を異にして居る。前は思想的に黃金時代とも云ふべき時代であり、今日は寧ろ物質的に盛な時代である。前のは文藝の獨逸、今日のは產業の獨逸と云ふ事が出來る。文明を論ずる點に於てはむしろ今日の獨逸を考へねばなるまい。これがかの不毛の地に居りながら、殖產興業に於てかゝる隆盛を來して居るのは、こゝに何か理由がなくてはなるまいと思ふ。又同じ英國と云ふ中でも蘇格蘭は殊に土地氣候の善くない國柄であるが、この土地に又一種磅礴たる力が動いて居る事を認めざるを得ない。蘇格蘭は嘗て南方の人と戰つて敗北しては居るが、土地が狹い事やら人が多くない事を考へると無理もない事である。この蘇格蘭から現今人材が頻りに起つて南方の人士を頭から壓到して居る姿がある。諸大學の教授と云ひ又倫敦諸寺院の大僧正と云ひ、其他英國社會の樞要の椅子は多く蘇格蘭人の占むる處となつて居る。予は今に忘れられぬ事である。

かつて蘇格蘭を遊歴した時此あたりの物産とも思はれる物が何一つ見當らぬので、エヂンバラ大學教授シンプソン博士にこの邊の産物に何がありますかと尋ねて見ると、同教授は唯一言「人物」と云つたばかりであつた。その强い言葉、更に其奥にある深い意味。吾人は今に至るまでこれを忘れられぬのである。誠に世界を眺めて見る時、蘇格蘭人が至る處に活躍して居るのを發見する。しかも彼等は何をして居るかと云ふに、勞働者は殆んど一人も居らず、比較的高等な事業、例へて云はゞ會社なら支配人、大學ならば教授、汽船ならば機關士と云ふ工合に何處に行つても大任を引受けて働いて居る。これにも定めて理由がなければならぬと思ふ。

昔の文明は南方から來た文明である。今の文明は北方から來る文明である。その兩文明の根據は同じものではない。南方の文明は云はゞ天然の思想を蒙つて居る事がない。概して南の方が土地は肥沃である、氣候はよい、そして又水陸の便もよく開けて居る。之に反して北方は天然の恩惠を受ける事至つて少ない。むしろ其文明は天然の不便に反抗して起つた文明である。現にプロシアの文明と云ひたい。現にプロシアの文明しかり、蘇格蘭の文明然り、更に露西亞は近き將來に益々此人力の文明を開いて來る事であらう。この天然の不幸に打勝つて文運を開いて行く精神と云ふものは、一朝一夕に勃發して來るものであるとは思はれぬ。必ずや依つて起つて來る處がなくてはならぬ。必ずや百年千年の長い間の訓練を經て來て居る事である。プロシヤの如きは彼名君フレデリツキ大王の治世の當時には殆んど平易なる農業をさへ解せぬ無能無智の人民であつたと云ふ。うまごやしやポテートーをさへ植ゑる事を知らなかつたと云ふのである。これが訓練されて今日のこの驚くべき國民となつたのである。實に

この訓練者としてビスマルクを有して居た彼等は幸福である。人々は單にビスマルクを目して政治家として居るが、これは甚だ彼に取つて盡さゞる處である。「ビスマルクは教育家也」と云ふ書物がある。誠に一個の達識を備へた國民教育家と見てある。ビスマルクの如きは誠に北方の人の典型として擧げてよろしからうと思ふ。北方の人は概してかくの如く頑强である。意志が强い。素樸である。勇健である。ビスマルクの如きはむしろ蠻的に近い方であつた。プロシアには澤山のスラヴ人が入り込んで居るが、これが又更に蠻的な熊の如き人種である。ビスマルクの第一の快樂として居たのは、此スラヴ人の仲間に入つて行つて談話を交換する事であつたさうである。ビスマルクもむしろ熊であつた。かくの如き人の訓練を經たのである。而も此の同樣の性格は普くプロシア人の心の中にも宿つて居たので、內外相呼應して彼等の發展は實にめざましいものである、寒氣何ものぞ、瘦地何ものぞ、天然之れ何ものぞと云ふ勢を出して、或は土地を拓き、山林を造り乃至工場を興して、祖先數代養ひ來つた北方の性格を以て活動した結果、プロシア王國をして鷲の太陽を目指して天驅ける如く、世界の中心に突進せしめたのである。土地を拓いて成功するのはとにかく偉大な事業である。而してこれに伴ふて來る更に〳〵偉大な効果は人格の獲得である。

○神の力を信任せよ

斯の如き事業をなせば、人格は疑はずして一開展を爲すのである。水陸の便をはかる事亦同じ、山林の經營亦同じである。その成功は農業の成功のみではない。農業の成功もある、けれども更に同時に人格の完成が得られたのであ

る。これ北方プロシア人の獲得物である。更に蘇格蘭人もかくの如し、かれは實に教育を重んずる國民である。彼等は其の狹小な國内に四個の大學を有して居る。聞く處に依れば蘇格蘭の商家農家其他凡ての家庭を通じて、一の望を持つて居る、それは吾々の兄弟の中から必ず一人は天下の人物を出したいといふのである。大學の教授か牧師か乃至はしかるべき樞要の椅子に座すべき人物を出したいといふのである。この爲めには兄弟が五人あれば四人は働いてあと一人、多くは末子を立てるのが習慣であるさうである、誠にゆかしい習慣である。かれらの家庭教育の根本はこれ蘇格蘭の特色とも見るべきものであつて、信仰問答で以て精神的に倫理的に嚴格にびし〳〵と養ひ上げるのである。それが山と戰ひ、寒氣と戰ひ、嵐と戰ふて、天然に對して萎靡せぬ剛健な人間の力を作り上げる基となる。工業の盛大なるよりもそれに依つて高い人格を獲得した處が偉らい。グラスゴーやクライドなどでは大仕掛な造船業が實に盛なものであるが、こゝで種々の驚くべき大きな械機を運動しつゝある人物の人格が勝れた賜物である。この根抵は人間の最も大切なる信仰である。ルーテルが云つて居る曰く、人は信仰に依りて義とせらるゝと云ふは形式上の信仰ではない、我は天地の主なる神を信ず云々と云ふ形式上の信仰ではない、其信仰は神から授かつた偉大な力を以て、吾は如何なる禍に捕へられても、必ず打勝つて行く事が出來ると云ふ信仰を指すものである。只空漠とキリストよと呼ぶにあらず、遠方にキリストを見るに非ず、キリストの心キリストの魂がわが衷にあつて活きて居ると云ふ信念即ち神の子がわが衷にゐますと云ふ信念より、萬事打勝つて行けると云ふ事を意味するのである。わが衷なる神の力、これを信じて之を獲取する力、この信任である、神の力に信任して立つと云ふ事である。淺薄

に云へば自信力である。併し決してそんな淺薄なものではない。自分の中なる神の靈、これを信ずるのである。キリストが富める者の神の國に入るは難いかなと歎ぜられた時、ペテロがそれでは誰が救はるゝ事が出來ますかと、尋ねたるに答へて『これ人には能はざる處也、されど神には能はざる處なし』と教へ給ふたと云ふ事がある。今云ふ信仰はこの信仰である。世の所謂自信力は『何のその！』と云つて奮ひ起る事は出來るが、惜しいかな往々頓挫する。大言壯語して起ち上る事は出來るが、急處を突かれると、忽ち顚倒してしまふのである。予はモーゼの十戒も何もかもよく守つて居りますと云つて、豪語してイエスの處へ來た富める青年が、キリストから、汝尙一つを缺く汝その所持物を悉く賣りすて、我に來れと云はれて、忽ち頓挫したと云ふのは、この適切な一例である。『これ人には能はざる處也、されど神には能はざる處なし』この信任この力によつて立つのが人力の根本でなければならぬ。カントの如き、何を以て人々を立たせる事が出來たかといふに、信仰に基ける實踐道德を主張したからである。汝は我愛子わが喜ぶ處のもの也と、神から云はれ、神の子が各自の心の根抵に宿つて居ると云ふ事を主張し、こゝに根抵を据えて教育を施したのである。眞に人格を訓練をする人は根抵を茲に据えて居るのである。故にこれが一度發揮すると、實に偉大な驚くべき力が出て來るのである。

○求めよ然らば與へられん

蘇格蘭人の訓練はこれと趣を異にして居るやうだが、茲に反つて力を獲得した。彼等はむしろ嚴正なカルビン主義即ち神に絕對の大權がある。萬事神の前に定つて居るといふ信仰を持つて居る。これは吾人をして運命主義に陷れ易い。

所が蘇格蘭人は此絶對の教義を信じて非常に强くなつた、彼等は神の前に著しく罪惡を感ずるのである。多く罪を感じ、無常を歎ずれば、弱くなり又萎縮してしまふ。然るに蘇格蘭人はこの罪惡と戰ふて、元氣を發した。何ぞ天然の逆境のみならん。神の絶對權を主張しつゝ、人の自由を高唱して居るのである。そこに誠に强いものがなくてはならぬ。彼等はかくの如く訓練に訓練を重ねて、遂に世界を支配する靈魂が出來て來たのである。これは皆人間の方面より云つた事であるが神の方から云つて見るに神は最も之を喜び給ふのである。かくの如き人に最多く靈の賜物を授け給ふのである。『求めよ然らば與へられ、尋ねよ然ばあひ、門を叩けよ然ば啓かるゝ事を得ん、蓋すべて求むる者は得、たづねる者はあひ、門を叩く者は啓かるれば也、汝等のうち父たる者誰か其子のパンを求めんに石を與へんや、魚を求めんに、其に代へて蛇を與へんや。卵を求めんに蠍を與へんや。然ば汝等惡しき者ながら善き賜物をその兒曹に與ふるを知る。まして天に存す爾曹の父は求むる者に聖靈を與へざらんや』實にかくの如き國民は求めて而して聖靈を與へられた。而して之を自覺してはたらきつつあるのである。

○涙を以て播く者は喜び以て刈る

我日本帝國將來の望みは、この人との中にある神の力に依つて凡てのものに勝てると云ふ一面の自覺に存して居る。日本の昔の文明は敢て尊びたくない。平安朝の文明は平安朝の墮落に終つたのではないか。東山時代の文明は東山の墮落に終つたではないか。更に德川時代の文明も德川時代の墮落に終つたではないか。日本の文明は皆墮落を意味して居る。その人格に於て更に褒むるに値